

# StandbyDisk Solo 日本語版

v2.1

ユーザーガイド

第 1 版

(2003 年 10 月 10 日)

本書に記載の内容は予告なしに変更される場合があります。

©Copyright 2003 StandbySoft LLC/NetJapan, Inc. All rights reserved.

StandbyDisk 及び StandbyDisk Solo は、(株) ネットジャパンの商標です。

Microsoft、Windows、Windows 2000、および Windows XP は、Microsoft Corporation の登録商標です。

StandbySoft LLC の書面による許可がない限り、一部または全部を無断で転載、複写、複製することはできません。

## 目次

ライセンス .....	3
サポート .....	5
概要 .....	6
ハードディスクの基礎知識 .....	8
STEP 1 始める前の準備と注意.....	12
STEP 2 インストールの実行.....	16
STEP 3 インストール後の設定.....	23
STEP 4 トラブルが発生した場合の操作.....	35
STEP 5 レスキューと復旧後に行う作業.....	43
その他の有用な情報 .....	46

## ライセンス

### StandbyDisk Solo 使用許諾契約書

本使用許諾契約書（以下「本契約書」といいます）は、ソフトウェア製品 **StandbyDisk Solo**（以下「本ソフトウェア」といいます）に関してお客様（個人または法人のいずれであるかを問いません）と株式会社ネットジャパン（以下「ネットジャパン」といいます。）との間で締結される法的な契約書です。本ソフトウェアは、コンピュータソフトウェア、関連した媒体、および印刷物、オンラインマニュアルを含みます。本ソフトウェアをインストール、複製、ダウンロード、アクセス、または使用することによって、お客様は本契約書の条項に従う旨、同意したことになります。本契約書の条項に同意されない場合には、CD キャラメル包装を開封せず、パッケージを直ちに購入場所に返却してください。

本ソフトウェアは、著作権法および著作権に関する条約をはじめ、その他の無体財産権に関する法律ならびに条約によって保護されています。

**1. ライセンスの許諾** 本契約書はお客様に以下の権利を許諾します。

- (1) お客様は本ソフトウェアを、購入ライセンス数、特定のコンピュータ上で使用することができます。購入ライセンス数は同梱のライセンス証書または登録用紙に印刷されています。
- (2) バックアップ目的でのみ、本ソフトウェアのコピーを一部作成することができます。コピーには本ソフトウェアに含まれている全ての著作権表示を必ず含んでコピーしてください。
- (3) 本契約書に特に規定されていない権利は全てネットジャパンおよび第三者が保有します。

### 2. その他の権利と制限

- (1) 移管 お客様は、本ソフトウェアをお客様が所有する他のコンピュータに移管することができます。移管する際、移管前のコンピュータから本ソフトウェアを消去しなくてはなりません。
- (2) 制限 お客様は、本ソフトウェアへの修正、追加、および本ソフトウェアをリバースエンジニアリング、逆コンパイル、または逆アセンブルしてはなりません。
- (3) 体験版 お客様が入手された本ソフトウェアに、「体験版」または「NFR」と明記されている場合は、本契約書の他の規定に関わらず、お客様は、本ソフトウェアをデモンストレーション、テストまたは評価の目的で 사용할 ことができますが、それ以外の目的で 使用することはできません。
- (4) レンタルおよび再販 お客様は本ソフトウェアをレンタル、リース、貸与、再販、譲渡することはできません。
- (5) 契約の解除 お客様が本契約書の条項および条件に違反した場合、ネットジャパンは本契約を解除することができます。そのような場合には、お客様は本ソフトウェアのコピーも含めてその構成部分を全て破棄しなくてはなりません。

### 3. 輸出規制

お客様は、本ソフトウェアを日本およびアメリカ合衆国の輸出規制の対象である国、個人あるいは法人に輸出または再輸出しないことに同意したものとします。

### 4. 限定的保証

(1) ネットジャパンは、本ソフトウェアが付属のマニュアルに従って実質的に動作しない場合または本ソフトウェアの媒体またはマニュアルに物理的な瑕疵がある場合に、お買い上げ後 90 日間に限り、ネットジャパンの判断に基づき、交換、修理、または代金返還のいずれかにより対応するものとします。

(2) 上記 (1) の対応は、お客様が本ソフトウェアを購入したことを証する領収書とともに本ソフトウェアをネットジャパンに返却した場合にのみ提供されます。

(3) ネットジャパンは、本ソフトウェアに関して、明示、黙示を問わず、本契約書に規定されていない商品性および特定の目的に対する適合性を含むその他の保証を一切いたしません。

(4) ネットジャパンはいかなる場合も、本ソフトウェアの使用不能から生じる本契約書に規定されていないその他の損害（逸失利益、事業の中断、事業情報の喪失またはその他の金銭的損害を含みますが、これらに限定されません）に関して、一切責任を負わないものとします。例えば、ネットジャパンがそのような損害の可能性について知らされていた場合でも同様です。いかなる場合においても、本契約書に基づくネットジャパンの責任は、本ソフトウェアについてお客様が支払った金額を上限とします。

### 5. 準拠法

本契約書は、日本国法に準拠します。

## サポート

### ㈱ネットジャパン連絡先

#### 営業的なお問合せ：

㈱ネットジャパン 営業部

電話： 03-3864-5210

ファックス： 03-3864-5211

E メール： [sbd@netjapan.co.jp](mailto:sbd@netjapan.co.jp)

営業時間： 休日・祝日を除く月曜日から金曜日までの 9:30 ～ 12:00、13:00 ～ 17:50

#### テクニカルサポート：

㈱ネットジャパン カスタマーサービス部

電話： 03-3864-5215

ファックス： 03-3864-5244

E メール： [sbd-support@netjapan.co.jp](mailto:sbd-support@netjapan.co.jp)

電話受付時間： 休日・祝日を除く月曜日から金曜日までの 10:00 ～ 12:00、13:00 ～ 17:00

#### ネットジャパン ホームページ：

<http://www.netjapan.co.jp>

## 概要

### StandbyDisk Solo とは

StandbyDisk Solo は、システムボリューム（一般的に C: ドライブ）に障害が生じた際に、すみやかに復旧を行うためのユーティリティソフトです。

StandbyDisk Solo は、システムボリュームの内容をスタンバイエリアと呼ばれるハードディスク上のエリアに保存し、問題が生じたときにスタンバイエリアと使用していたエリア（カレントエリア）とを入れ替えることで復旧を行います。

スタンバイエリアは、システムボリューム内にアクセスのできないエリアとして確保されます。したがって、StandbyDisk Solo を導入する際には、現在使用しているカレントエリアと同等かそれ以上の空きがシステムボリューム内になくてもなりません。

また、StandbyDisk Solo は起動を監視します。ファイルの破損などで起動がうまくいかなくなっても、起動時に特定のキーを押すことでスタンバイエリアとカレントエリアの入れ替えを行うことが可能です。これによって、たとえ Windows が起動しないような状況でも復旧作業が可能になっています。

### ユーザーガイドの流れ

本ユーザーガイドでは、最初にハードディスクの簡単な知識を紹介します。これは、StandbyDisk Solo を使っていく上でハードディスクの基本的な動作を理解していないと操作を間違えたり、トラブルに陥る可能性があるからです。すでにこのような知識をお持ちのユーザーであれば、この部分は飛ばしてもかまいません。

インストール前の準備から実際の使用方法に関しては、STEP 1 ～ 5 としてまとめてあります。それぞれの STEP については以下のような内容です。

トラブルが実際に発生した場合には STEP 4 から … というように、必要に応じて該当するページを参照してください。

なお、本ユーザーガイドに記載していない詳細情報に関しては、HELP やリファレンスマニュアルをご参照ください。

### STEP 1 始める前の準備と注意

StandbyDisk Solo の仕組みと、どのような動作によって復旧をするのか、そしてインストール前に行っておく作業などについて触れます。

### STEP 2 インストールの実行

まず、インストールの前に行っておく前処理（ハードディスクの最適化やエラーチェック）について触れ、その後実際のインストール手順について説明します。

### STEP 3 インストール後の設定

StandbyDisk Solo をインストールしたあと、実際にシステムボリュームを保存する手順や個別

ファイル/フォルダの保存、スケジュールによる自動保存などの方法を解説します。

#### STEP 4 トラブルが発生した場合の操作

トラブルが生じた際に、レスキュー起動をどのように行うか、さらにレスキュー起動後に作られたファイルや更新されたファイルの救出方法を説明します。

#### STEP 5 レスキューと復旧後に行う作業

レスキュー作業が終了したあと、新しく復旧されたカレントのエリア（使用しているシステムボリューム）の内容を、再びレスキュー可能な状態にする方法を解説します。

#### その他の有用な情報

市販のパソコンのパーティション構成と、典型的な StandbyDisk Solo の使い方、テストレスキューなどオプション的な機能の使用方法、StandbyDisk Solo で更新されないファイルの説明など、StandbyDisk Solo を使っていく上での有用な情報を説明します。

## ハードディスクの基礎知識

### ハードディスクとパーティション

StandbyDisk Solo の動作を理解するには、ハードディスクの基本的な知識が必要です。そこで、ここでは StandbyDisk Solo の操作に最低限必要となる用語や動作原理などを紹介しましょう。

一般に、パソコンには 1 台ないしは 2 台のハードディスクが使われています。市販のノートパソコンやデスクトップパソコンでは 1 台というケースがほとんどでしょう。

ハードディスクは、その中でパーティションという区切りに分けられています。1 台のハードディスクの中には基本パーティションを 1 ～ 4 つまで作ることができます<sup>(1)</sup>。基本パーティションの他に拡張パーティションというものがあり、こちらは 1 つだけ作ることができます。拡張パーティションを作る場合には基本パーティションは 1 ～ 3 つまでとなります。つまり、1 台のハードディスクの中には、基本パーティション+拡張パーティションを合わせて最大 4 つまで持つことができるわけです。ただし、基本パーティションは同時に使用することはできないので、使用することができる状態（アクティブ）になっている基本パーティションは常に 1 つで、ハードディスクの中でそれ以上のパーティションを同時に使いたい場合には拡張パーティションを使用することになります。

拡張パーティションを作成した場合、基本パーティションと違ってそのまま拡張パーティションを使うことはできません。必ず、拡張パーティションの中に複数の論理パーティションと呼ばれるパーティションを作成して使用します。論理パーティションはいくつも作ることができますので、たとえば基本パーティションを C: とし、拡張パーティションの中を 3 つに分けて、それぞれ D:、E:、F: ドライブというようにドライブレター<sup>(2)</sup> を割り当てて使うことなどが可能になります。

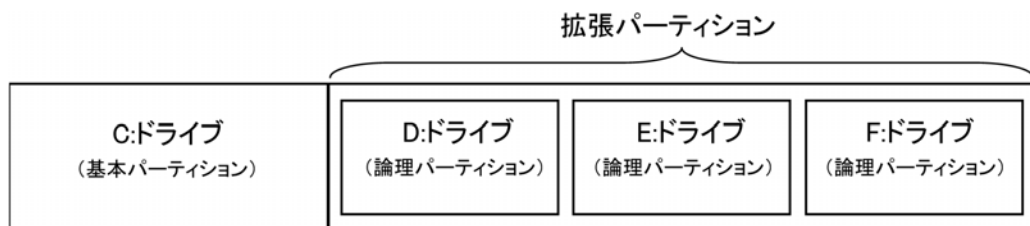


図-1 パーティションの構造

#### 1. 作成可能な基本パーティションの数

MS-DOS や Windows 95/98/Me など 9x 系の Windows に付属の FDISK コマンドでは 1 台に 1 つの基本パーティションしか作成できません。

#### 2. ドライブレター

Windows や MS-DOS などの OS では、基本パーティションや拡張パーティション（の中にある論理パーティション）に対してドライブレターというものを割り当てて使用します。ドライブレターは、A ～ Z までの英字 1 文字とコロン (:) で示されます。慣例として A: と B: はフロッピーディスクドライブを表し、ハードディスクは C: から始まります。



## ボリューム

Windows 2000 と Windows XP では、従来のハードディスク 1 台をパーティションで分けて使用する方法に加え、複数のハードディスクにまたがってパーティションを管理し使用する方法も採用されました。前者をベーシックディスク、後者をダイナミックディスクと言います。

ダイナミックディスクが追加されたことにより、ドライブレターの割り当てはパーティションだけでなくボリューム（Windows が管理する領域：従来のパーティションはシンプルボリュームという）に対しても可能になっています。

一般に、市販のパソコンや標準的にインストールした状態のパソコンでは、とくにボリュームを操作しない限り、システムなどで使われるボリューム（システムボリューム）は C: になっているはずです。StandbyDisk Solo は、このシステムボリュームを保護することで万が一の事態に備えるツールです。

**注意：** StandbyDisk Solo はダイナミックディスクには対応していません。

## マスターブートレコード（MBR）とブートセクタ

パソコンが起動する際には、電源が投入されたあと BIOS によって起動するハードディスクが決定され、その一番先頭にあるセクタ<sup>(1)</sup>を最初に読み込むという作業が行われます。このセクタをマスターブートレコード（MBR）と言います。MBR には、実行プログラムとそのハードディスクドライブのパーティション構成が記録されています。このパーティション構成を記録する場所（パーティションテーブル）が 4 つなので、先に触れたようにハードディスクドライブ 1 台あたりの基本あるいは拡張パーティションは最大 4 つとなります。

StandbyDisk Solo は、他のリカバリーツールと異なり MBR にプログラムを書き込みません。

また、MBR のパーティションテーブルにはどのパーティションがアクティブ（起動可能な状態）になっているかの情報も記録されています。このため、Windows 系の OS では、アクティブな状態にある基本パーティションの先頭セクタ（ブートセクタ）が選択されて OS の起動（ブート）がはじまります。アクティブにできるのは基本パーティションだけなので、拡張パーティションのなかの論理パーティションに OS をインストールしたい場合には、基本パーティションの中に OS のローダーを置き、まず MBR から基本パーティションのブートセクタを選択し、そこに置かれた OS ロードから論理パーティションの OS を起動するようになります。Windows NT や 2000、XP で採用されているのはこの形式の起動方法です。

**注意：** StandbyDisk Solo では、OS がインストールされているパーティションに OS ロードがインストールされている必要があります。

---

### 1. セクタ

一定の長さのディスク領域の単位。Windows 系のパソコンで使われるハードディスクでは 512 バイト

実態に即した形で見ると、1つのハードディスクをまるまる1つのパーティションとして使用するような場合には、以下のような構成となります。

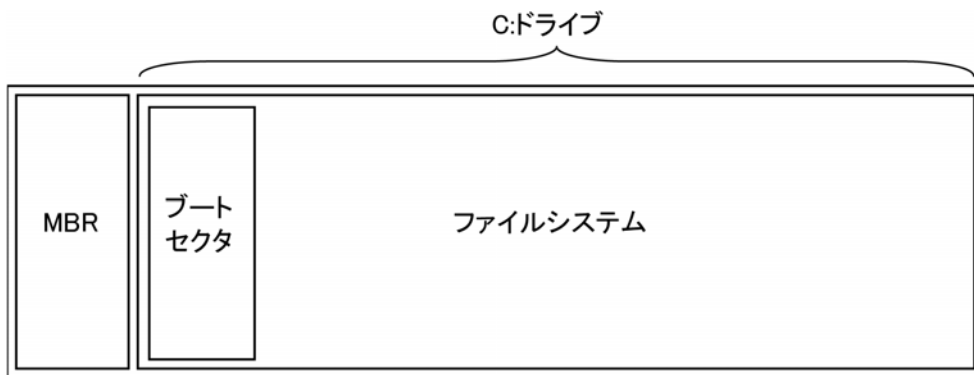


図-2 1つのドライブに1つの基本パーティションの例

あるいは、メーカー製パソコンによく見られるような、1つのハードディスクドライブでありながら、C: と D: の2つのドライブレターにわかれているようなケースでは、以下のような構成になります。

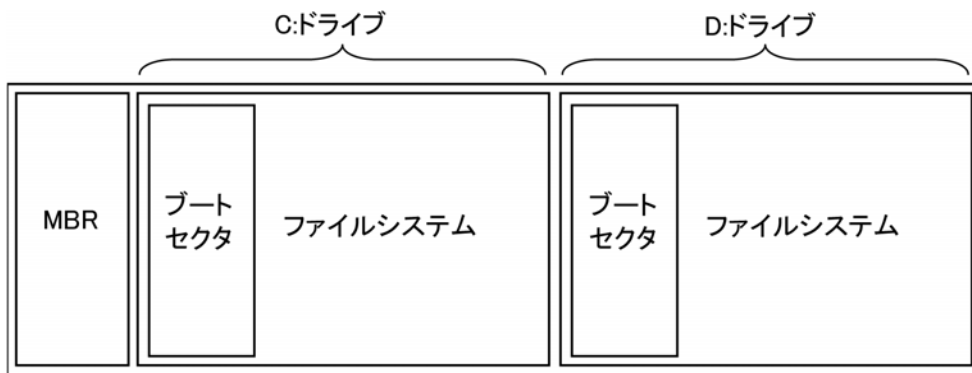


図-3 1つのドライブを2つのパーティションに分けた例

## バックアップの仕組み

先に述べたような MBR は OS で通常のファイルのように操作できません。

このため、たとえば C: ドライブにあるファイルやフォルダを丸ごと他のドライブにコピーしてハードディスク交換を行いたいと思っても、MBR などの情報が欠落しているのでブートすることはできません。OS の起動を含む完全なバックアップを取りたいければ、バックアップ用のソフトウェアを使用するなど他の方法に寄らなくてはなりません。

また、C: ドライブにインストールされているプログラムやシステム関係のファイルなどは、他のドライブレターに変更されると動作しないケースがあります。このため、C: ドライブが一杯になったからといって、増設ドライブに移動してもうまく動作するとは限りません。

プログラムファイルやシステムファイルに比べれば、データの移動は比較的簡単なので、新しく増設したハードディスクドライブに「マイドキュメント」の中身をすべて移動するなどの操作は比較的簡単におこなうことができます。初期状態でハードディスクが C: と D: のボリュームに分割されている場合には、D: にデータ類を置くように設定しておけば、データが増えるにしたがって C: ドライブが圧迫されることはなくなります。もちろん、アプリケーションなどを沢山インストールすれば C: ボリュームが圧迫されることに違いはありませんが、データによる圧迫を避けられるだけでも効果は大きいでしょう。

## STEP 1 始める前の準備と注意

### StandbyDisk Solo の仕組み

StandbyDisk Solo は、パソコンのハードディスクのうちでもっとも重要なシステムボリューム（通常は C: ドライブ）を護るためのソフトウェアです。

システムボリュームをどのように保護するかというと、あらかじめシステムボリュームの内容（以後カレントエリアと呼びます）を丸ごと保存用の領域（以後スタンバイエリアと呼びます）にコピーしておき、システムボリュームに万が一の自体が生じた場合にはその内容をすみやかに保存しておいた内容によって元に戻すという仕組みです。

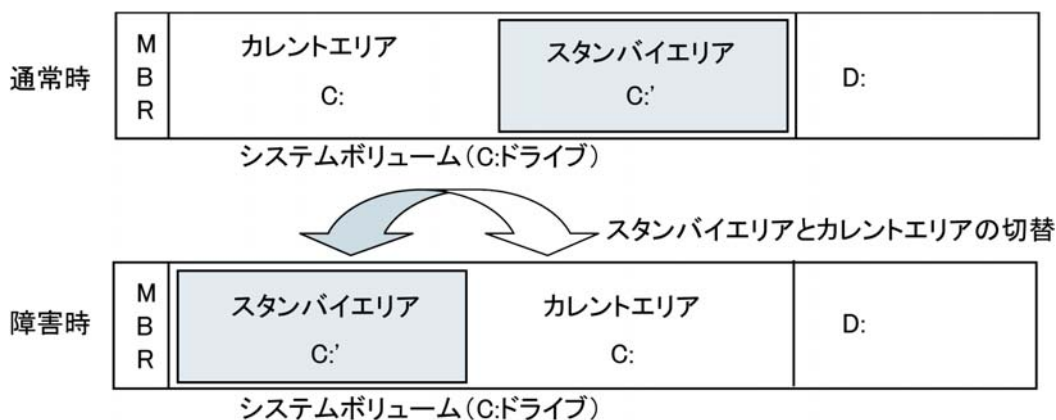


図 -4 StandbyDisk Solo の仕組み

### StandbyDisk Solo の動作と流れ

StandbyDisk Solo の動作の状態は以下のような流れになります。

はじめに、StandbyDisk Solo をインストールして、システムボリュームを保護します。これによって、システムボリューム全体が隠しファイルとして保存される領域（スタンバイエリア）が確保されます。スタンバイエリアはシステムボリュームと同じボリューム内に作られますが、この領域はエクスプローラなどから削除やコピーは行えません。

StandbyDisk Solo をインストールしてスタンバイエリアを確保しただけでは、まだボリューム内容のスタンバイは行われません。スタンバイ状態にするには **[ボリューム更新]** ボタン（25 ページの画面 11 を参照）を押します。これによって、はじめてボリュームの更新が行われ、その時点でのボリュームのコピーがスタンバイエリアに保存されます。

スタンバイエリアに保存された情報は、ボリューム更新した時点でのシステムボリュームですから、その後、日常的にパソコンを操作していけば徐々にカレントエリアとの食い違いが生じてきます。

適当な間隔で保護ボリュームを「更新」すればその時々の内容が反映されます。

スタンバイエリアへの更新を手でいちいち行うのは面倒ですが、スケジュールに登録することで更新を自動的に行うことができます。

ただし、あまり頻繁にボリューム全体の更新を行うと、問題が生じたあとで更新を行ってしまう可能性もあります。StandbyDisk Solo ではボリューム全体の更新の他に、ファイルやフォルダ単位での更新も行えますので、頻繁に更新するデータファイルは毎日スケジュールで行い、ボリューム全体の更新はプログラムのインストール時や OS の更新時などの区切りごとに手動で行うか、1ヶ月に1度程度のスケジュール更新にしておくなどのきめ細やかな更新を行うことができます。なお、スケジュールによって実行される更新機能は、Windows の「タスク」のスケジュール実行を使っています。

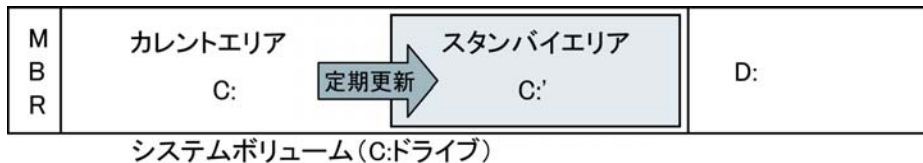


図 -5 スケジュールによってボリューム更新が可能

このようにして日常のデータは適宜保存されるようになりますが、実際にトラブルが発生したときには、StandbyDisk Solo はどのような動作を行うのでしょうか。以下、その動きを見ていきましょう。

まず、現在使用しているシステムボリュームに何らかの障害が発生したとします。

もっとも単純な例だと、カレントエリアに問題があって OS (Windows 2000/XP) の起動すらできなくなってしまうケースが考えられます。このような場合には3回起動を試みたあとに「自動レスキュー起動」機能が働き、レスキュー起動用のメニューが立ち上がります。ここで、レスキュー起動を選択すればスタンバイエリアの内容とカレントエリアの内容が入れ替わります。そして、再度起動が行われ、スタンバイエリアに保存されていた内容で OS が起動する仕組みになっています。

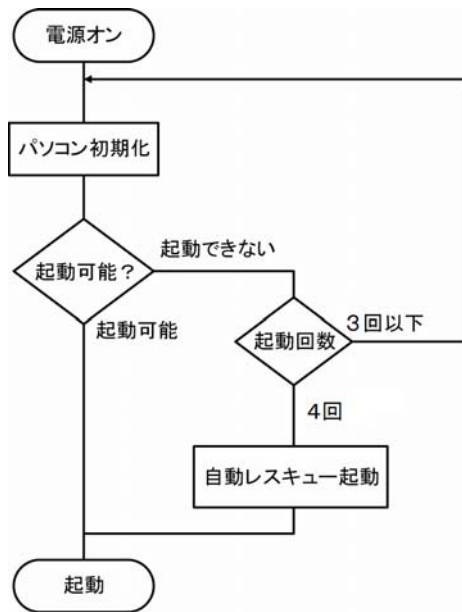


図 -6 自動レスキューの仕組み

起動はするが、何らかの不都合があって保存されていた状態に戻したいような場合には、手動でレスキュー作業を行います。

これには後述するように2つの方法がありますが、どちらの場合でもレスキュー作業を指示することでスタンバイエリアとカレントエリアの内容が入れ替わります。

レスキュー起動を行うと、カレントエリアは最新ではなく、最後に更新されたボリュームやファイル/フォルダで構成されます。もちろん、この状態でも使用することはできますが、損傷を受けていない最新のデータがスタンバイエリアに残されています。これらのファイルを現在のカレントエリアに「復旧」という作業で戻すことができます。これによって、かなりの部分まで最新のファイルを取り戻すことができるでしょう。

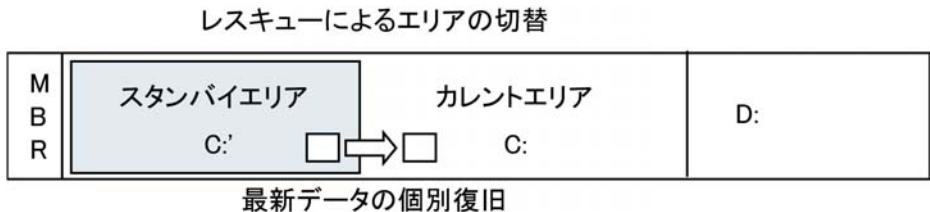


図 -7 復旧作業によって最新ファイルを取り戻す

復旧作業が終了したら、障害が起きる以前の状態に戻しておく必要があります。

これは、要するにインストール以降と同じ作業をすればいいわけですが、スタンバイエリアはすでに確保されているので、復旧作業の済んだカレントエリアの内容でスタンバイエリアを「更新」してやればよいだけです。この場合のボリューム更新は差分更新となりますので、インストール時に比べて短時間で終了します。

これら一連の作業によって、障害が生じる前の状態に戻します。再び障害が起きたあとの作業は上記のことを繰り返すだけです。

## 作業をはじめるまえに行っておくこと

StandbyDisk Solo をインストールする前に、システムボリュームにエラーがないかをチェックしておきます。ハードディスクドライブにエラーがある状態でインストールを行った場合、エラーのあるセクタをスタンバイエリアにコピーすることができません。まずはシステムボリュームを完全な状態にする必要があります。エラーのチェックにはエクスプローラなどでボリュームのプロパティを表示させてツールの中にある **[エラーチェック]** を実行します。

また、これは必須ではありませんが、同様にツールの中の「最適化」を実行することで、ハードディスク上で点在しているデータを無駄のないように配置しなおす（＝最適化あるいはデフラグ）ことができます。システムボリュームを保存する前に最適化しておくことで、スタンバイエリアに保存されるボリュームの中身も無駄のない状態で保存することができるわけです。

同様に、ウイルスチェックも必須ではありませんが行っておくと良いでしょう。せっかく保存したシステムボリュームが、ウイルスに感染していたのでは困ってしまうからです。

## こんな場合はインストールを行えない

インストール時に一番注意する必要があるのは、システムボリュームの空き容量です。すでに述べたように、StandbyDisk Solo はシステムボリュームと同じボリューム内にスタンバイ用のエリアを作成します。この仕組みからわかるように、システムボリュームの空き容量が 50 % を切っていたらスタンバイ用のエリアが作成できないため、StandbyDisk Solo をインストールすることができません。

また、システムボリュームのファイルシステムが FAT16 である場合にも StandbyDisk Solo をインストールすることができません。インストールするには NTFS か FAT32 ファイルシステムでフォーマットされている必要があります。

## STEP 2 インストールの実行

### ハードディスクの最適化、エラーチェック、ウイルスチェック

StandbyDisk Solo のインストールを行う前に、ハードディスクの最適化を行っておくことをお勧めします。

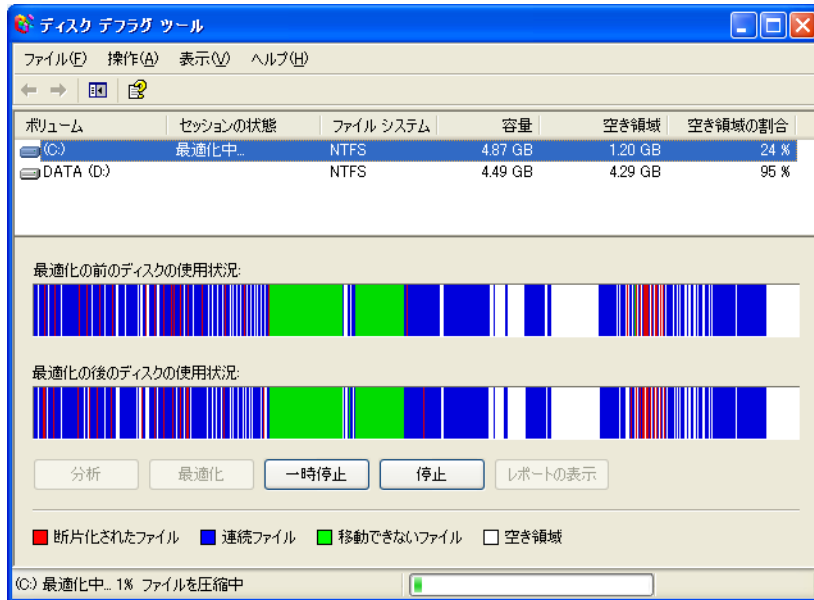
ハードディスクは使用していくうちに、データの書き込みと消去を繰り返すので、1つのファイルの内容が分断された形で保存されるようになってしまい、それによってファイルの読み出しに時間が余計にかかるようになります。これをなるべく効率よく読み出せるようにするため、連続した場所にファイルを移動させるなどの作業を行うのが最適化です。

Windows XP/2000 では [ スタート ] → [ プログラム ] → [ アクセサリ ] → [ システムツール ] → [ ディスクデフラグ ] を選択すると 「ディスクデフラグツール」 が起動します。

最適化の手順は簡単で、まずは対象となるボリューム（多くの場合ハードディスク）を選び、[ 分析 ] というボタンをクリックします。すると、ハードディスクの断片化がどの程度かを調べ、最適化が必要かどうかを判定してくれます。ここで、最適化が必要と判定されたら、[ 最適化 ] ボタンをクリックします。必要と判定されなかった場合でもこのボタンによって強制的に最適化を行うことができます。



最適化にはかなりの時間がかかることがありますので、パソコンの空いているときに行った方がよいでしょう。

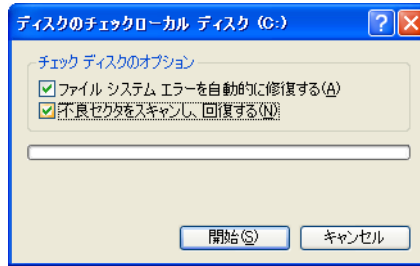


画面 -1 ディスクデフラグツール

もうひとつ実行しておいた方がよいのは、ハードディスクのエラーチェック（検査）です。ハードディスクに何らかのトラブルがあった場合、エラーがあるままのデータを気づかずに StandbyDisk Solo で保存してしまうことがないとは言えません。少なくとも一度はエラーチェックを行っておいた方がよいでしょう。

エラーチェックを行うには、マイコンピュータでハードディスクを右クリックし、プロパティを表示させます。ここで [ツール] の中の [エラーチェック] 項目の [チェックする] というボタンを押すと、ダイアログボックスが表示されます。このボックスにはチェックする項目が二つあります。それぞれは [ファイルシステムエラーを自動的に修復する] と [不良セクタをスキャンし、回復する] というものです。いちいち判断を仰がれるのが面倒な人は前者をオンにしておきます。後者

は、ディスクに欠陥などがあった場合に代替の領域などを使って回復を行うものです。ここを  
チェックした場合には、自動的に両方のチェックボックスにチェックしたものと扱われます。  
エラーチェックも最適化と同様に、終了までかなりの時間がかかります。したがって、パソコン  
を空けておく余裕のある時間帯に行うと良いでしょう。



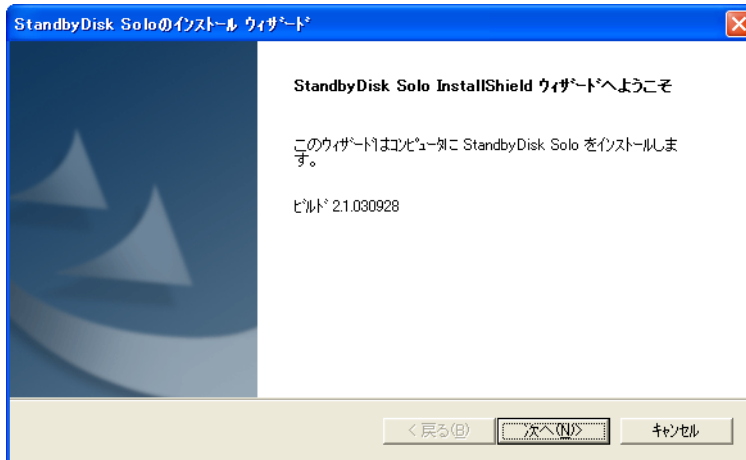
画面 -2 ハードディスクのエラーチェック

この他、ウイルスチェックも行っておけば安心です。ウイルスプロテクトソフトウェアを導入して  
あれば、ウイルスに感染している恐れは少ないものの、念のため StandbyDisk Solo で保存するボ  
リュームやファイルに対してチェックを行っておくとより安心でしょう。

## セットアッププログラムの実行

StandbyDisk Solo をインストールするには、StandbyDisk Solo のインストール CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。すると、自動的にセットアッププログラムが起動します。

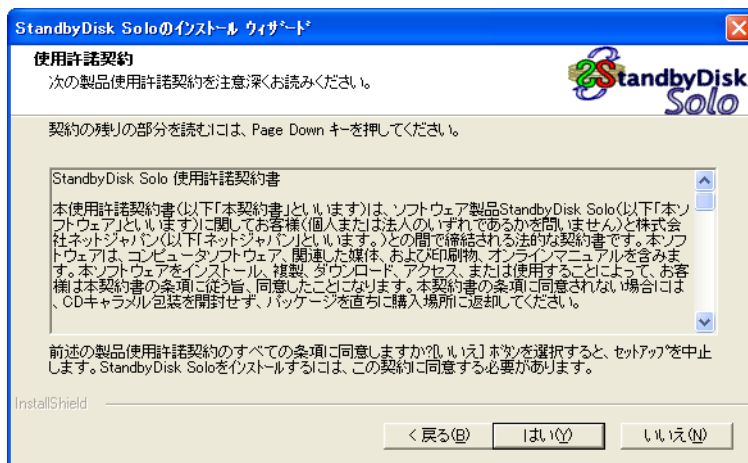
もし、セットアッププログラムが起動しない場合には「setup.exe」というプログラムを CD-ROM の中から探して起動します<sup>(1)</sup>。



画面 -3 セットアッププログラムが起動した状態

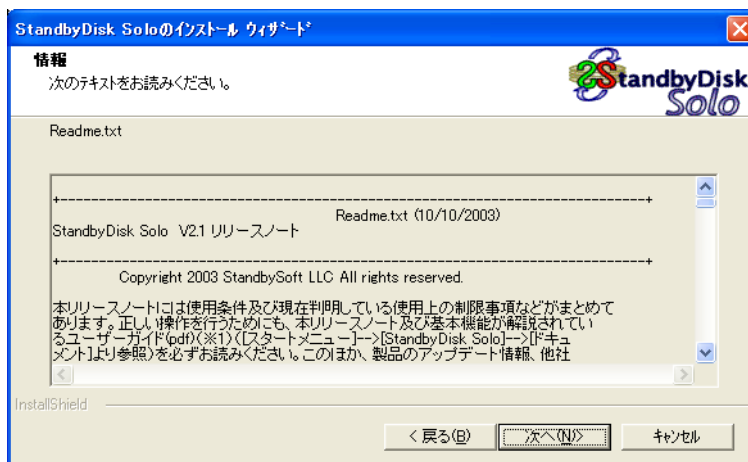
- 
1. 次のようにしてセットアッププログラムを起動することもできます。まず **[スタート]** ボタンを押し **[ファイル名を指定して実行]** を選択します。次に「ドライブレター:¥setup.exe」のように入力し、Enter キーを押します。ここでドライブレターは **d** や **e** など、インストール CD-ROM 挿入した CD-ROM ドライブに割り振られているドライブです。

インストールが開始されると、インストールウィザードのダイアログが表示されます。[次へ]というボタンをクリックすると使用許諾契約書が表示されます。StandbyDisk Solo の使用許諾に同意される場合には [はい] をクリックします。同意されない場合には [いいえ] をクリックするとインストールが終了します。



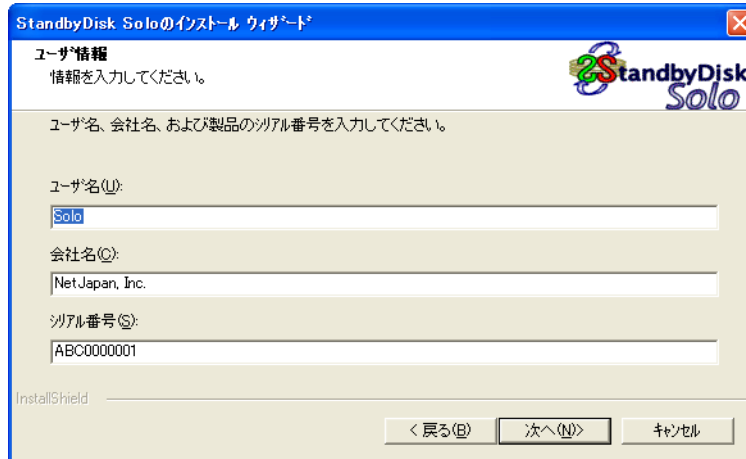
画面 -4 インストール開始

使用許諾に同意すると、次にリリースノートが表示されます。最後まで読み終えたら [次へ] ボタンをクリックします。



画面 -5 リリースノート

ユーザー名、会社名、シリアル番号（StandbyDisk Solo のユーザー登録はがきに記載されています）を入力し、[ 次へ ] ボタンをクリックします。



StandbyDisk Soloのインストール ウィザード

**ユーザー情報**  
情報を入力してください。

ユーザ名、会社名、および製品のシリアル番号を入力してください。

ユーザ名(U):  
Solo

会社名(C):  
NetJapan, Inc.

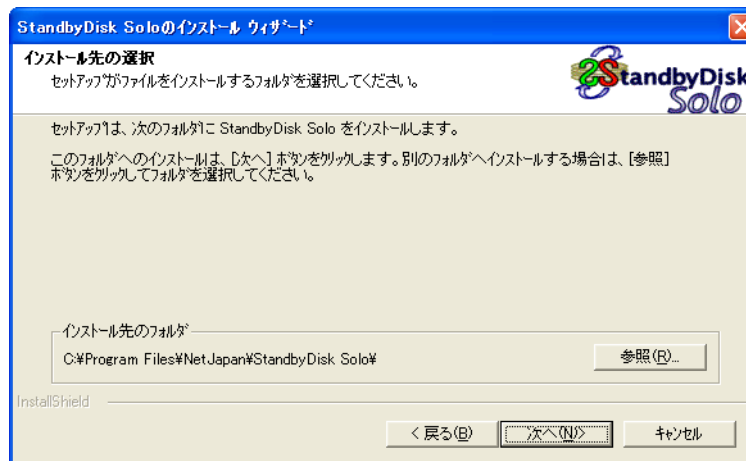
シリアル番号(S):  
ABC0000001

InstallShield

< 戻る(B)    次へ(N) >    キャンセル

画面 -6 ユーザー情報やシリアル番号などを入力する

そのあとにプログラムを保存するフォルダやスタートメニューのフォルダ名などを指定します。



StandbyDisk Soloのインストール ウィザード

**インストール先の選択**  
セットアップがファイルをインストールするフォルダを選択してください。

セットアップは、次のフォルダに StandbyDisk Solo をインストールします。

このフォルダへのインストールは、[ 次へ ] ボタンをクリックします。別のフォルダへインストールする場合は、[ 参照 ] ボタンをクリックしてフォルダを選択してください。

インストール先のフォルダ  
C:\Program Files\NetJapan\StandbyDisk Solo\

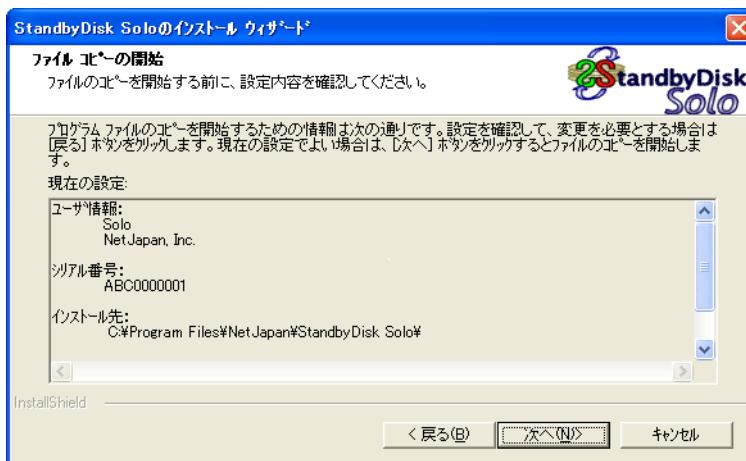
参照(R)...

InstallShield

< 戻る(B)    次へ(N) >    キャンセル

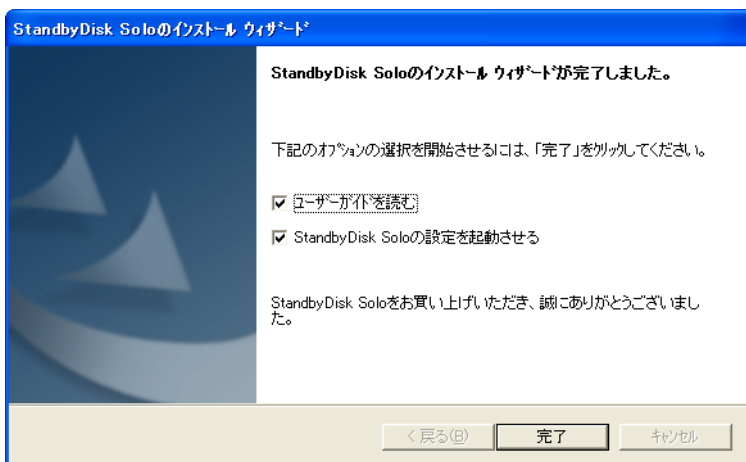
画面 -7 インストール先の選択

最後に、これまでの設定を記述した画面が出ます。これより先に進むと変更ができませんので、もういちど設定をよく見て、間違いがなければ[次へ]をクリックしてファイルのコピーをスタートします。



画面 -8 最終確認画面

インストールの状況を知らせる画面が表示され、すべてが終了すると、インストール後にStandbyDisk Solo を起動して設定を行うかどうかを尋ねる画面が表示されます。



画面 -9 インストール後のオプション画面

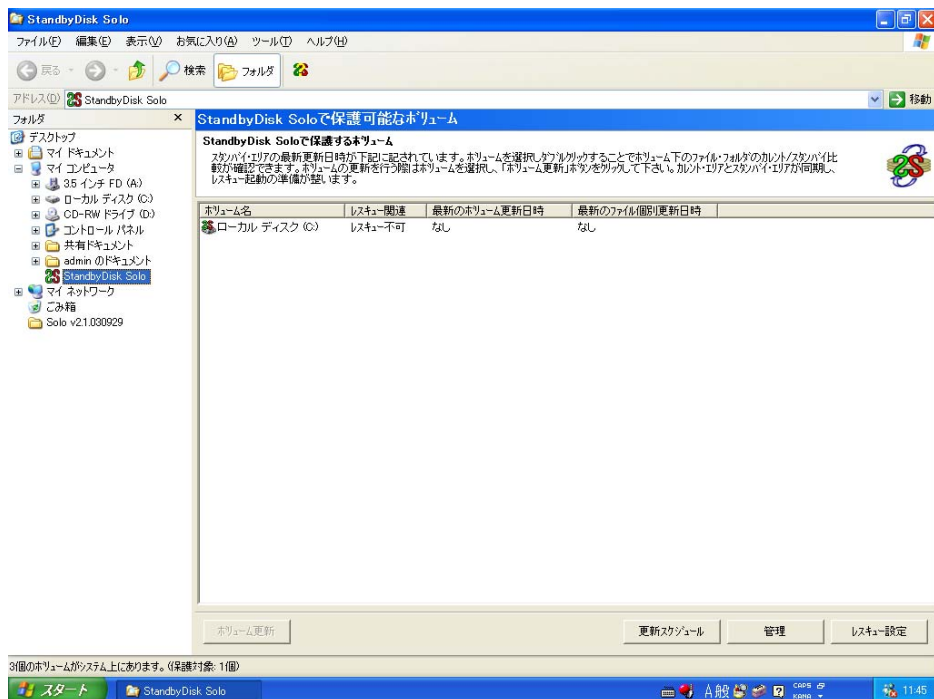
以上で StandbyDisk Solo のインストールは完了です。

## STEP 3 インストール後の設定

### StandbyDisk Solo の操作方法

STEP 2 のインストール時に、[StandbyDisk Solo の設定を起動させる] にチェックマークを入れておけば、StandbyDisk Solo エクスプローラが自動的に起動します。あるいは、[スタート] → [StandbyDisk Solo] → [StandbyDisk Solo] を選んでも同じように起動します。

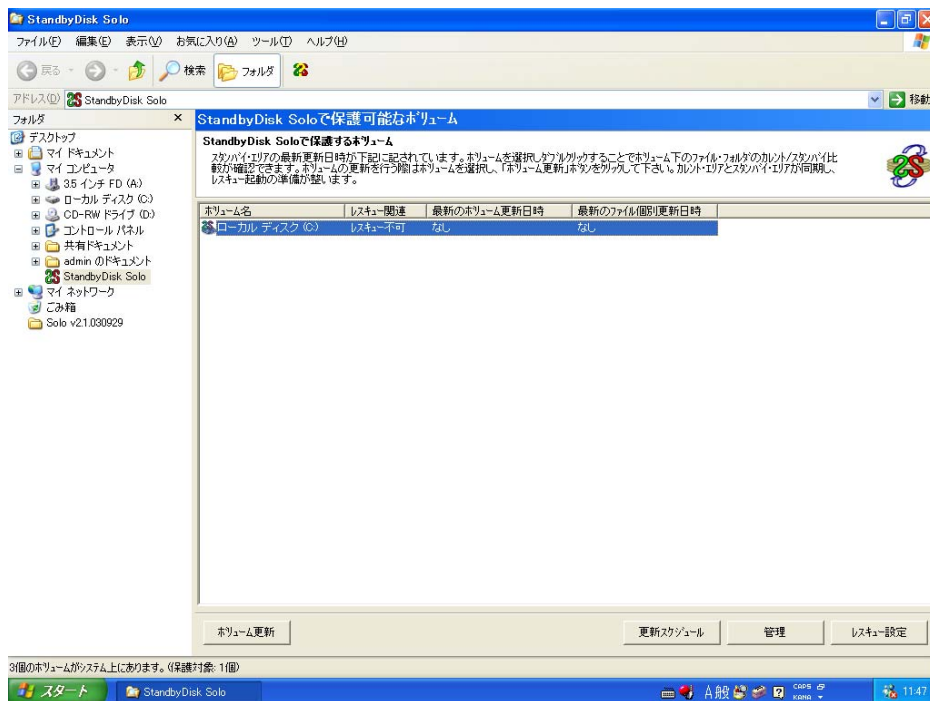
StandbyDisk Solo エクスプローラは単体のプログラムではなく、通常のウィンドウズエクスプローラの拡張部分として StandbyDisk Solo の操作機能が組み込まれたものです。



画面 -10 StandbyDisk Solo エクスプローラの画面

インストール直後の何もしていない状態では、StandbyDisk Solo エクスプローラが起動するとともに「StandbyDisk Solo で保護可能なボリューム」という画面が表示されます。

この段階ではまだ StandbyDisk Solo によるボリューム内容のスタンバイは行われていません。スタンバイを可能にするためには、保護するボリュームをクリックし [ボリューム更新] ボタンをクリックします。

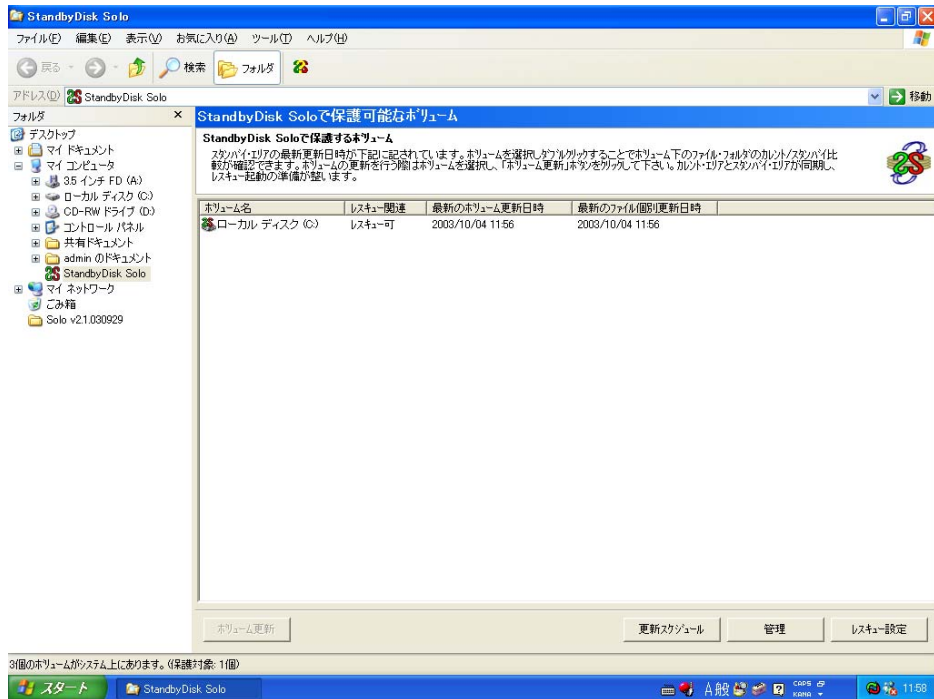


画面 -11 表示されたボリュームの中から保護するボリュームを選択し [ボリューム更新] ボタンをクリックする

[ボリューム更新] ボタンをクリックすると、スタンバイエリアにボリュームのコピーが始まります。初めて更新作業を行う場合には、システムボリュームを丸ごとコピーするのとはほぼ同等の時間がかかります。この時間はハードディスクやハードディスクインターフェースの性能、ボリュームの容量などによって左右されますが、1 時間以上かかる場合もあります。



ボリュームを更新すると、「レスキュー関連」という項目がそれまでの「レスキュー不可」から「レスキュー可」になります。



画面 -12 ボリュームを更新すると「レスキュー可」になる

「レスキュー関連」項目が「レスキュー可」になれば、ボリューム内容がスタンバイされたことになります。

## スタンバイエリアへの個別ファイル・フォルダの更新

ボリュームを更新するとその時点でのボリューム全体が保存されますが、それ以降作成したファイル、更新したファイルなどは当然のことながら反映されません。

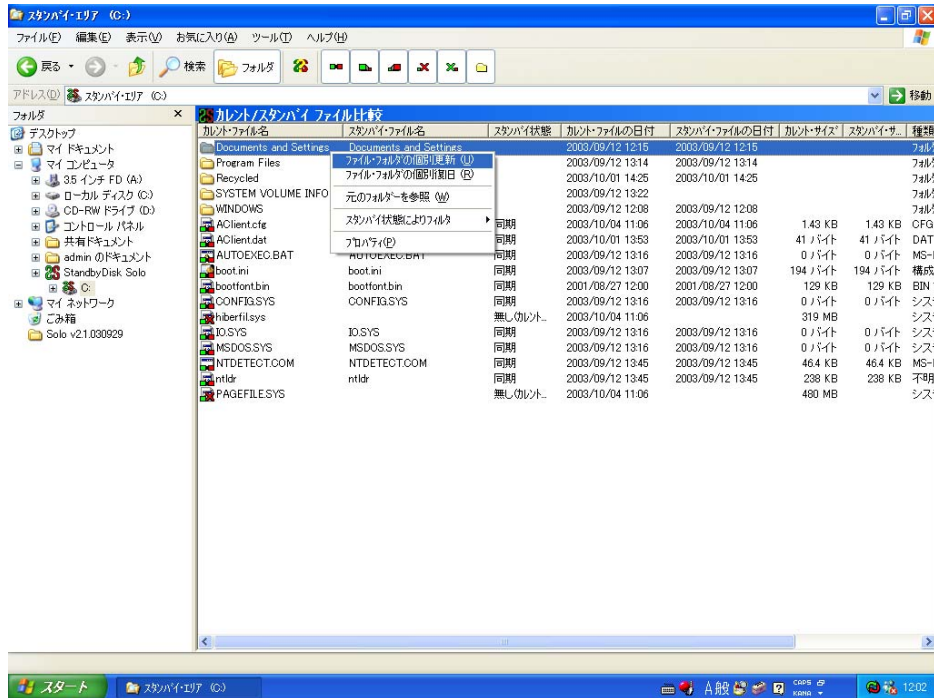
このような場合、適当な時点でボリューム全体を更新すればよいように思われます。しかし、マメに更新することが必ずしもよいとは限りません。なぜならば、何らかの不具合があったとしてその状態で更新をかけてしまったら、もはや不具合発生以前の状態には戻せないからです。このため、ボリュームの更新とファイル/フォルダの更新とは別々に実行するのが望ましいでしょう。

ボリュームの更新については、OS のアップグレードを行う前、あるいは何らかのプログラムのインストールをする前など、システムに関係する変更を加える節目で更新しておくのがよいでしょう。なぜなら、ボリューム更新で保存が必要になるのは、おもにシステム関係の情報です。つまり、正しい状態でプログラムやシステムが動く時点まで復旧できればいいわけです。こうした条件を考えれば、それほど頻繁に更新しなくても良いことがわかります。

ただし、こうした節目での更新は手動で行わなくてはなりませんから、どうしても忘れがちになります。そのような心配があるのでしたら、1ヶ月に1回程度のスケジュール更新（28 ページを参照）を行うとよいでしょう。ただし、スケジュール更新の場合には、必ずしも望み通りの状態で保存してくれるかどうかはわからないことを覚悟しておかなければなりません。

このようなボリュームの更新形式を採用した場合、これとは別に、データや文書など頻繁に更新する必要があるファイルについてはもっと短い間隔で更新を行うように指定します。個別に更新するファイルやフォルダとしては、たとえば「マイドキュメント」フォルダが筆頭にあげられるでしょう。多くのデータや文書のファイルはここに保存されることが多いからです。「マイドキュメント」フォルダではなく普通のフォルダやファイルを更新することもできます。

実際の作業としては、StandbyDisk Solo エクスプローラで対象となるボリュームをダブルクリックすることで、スタンバイエリア内に保存されているファイルやフォルダの一覧が表示されますので、ここで個別にファイルやフォルダを指定して、更新作業を行います。



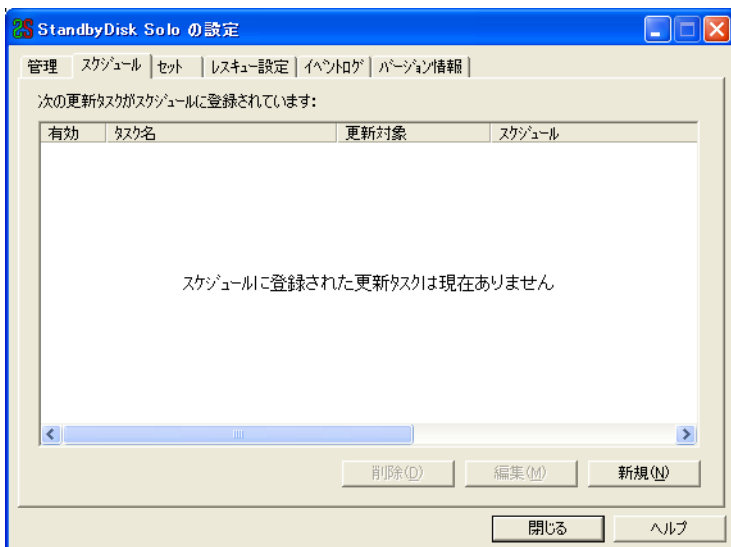
画面 -13 ファイルやフォルダの手動更新

しかし、頻繁に更新される「マイドキュメント」を手動で更新するのは、たとえ 1 日 1 回としても面倒です。

典型的なパターンとして、マイドキュメントフォルダがある「Documents and Settings」フォルダは 1 日に 1 回、ボリューム全体は 1 ヶ月に 1 回更新を行うように、スケジュールに登録してみましょう。

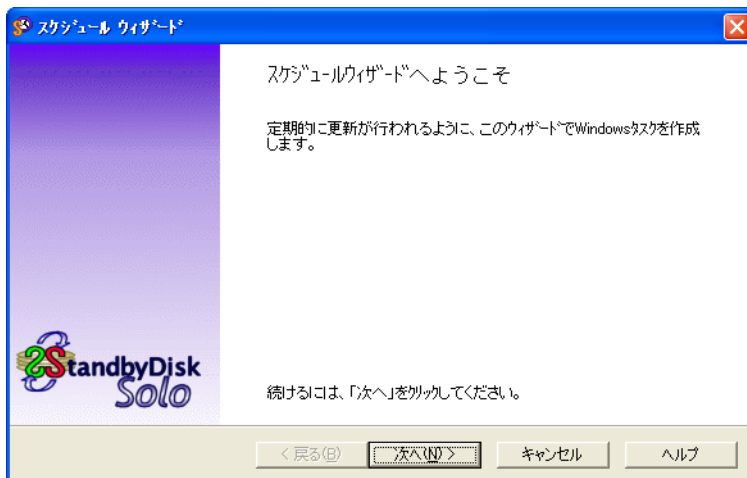
まず、StandbyDisk Solo エクスプローラを起動させ [更新スケジュール] ボタンをクリックします。ここで「StandbyDisk Solo の設定」で [スケジュール] タブが表示された状態になります。

この時点では何もスケジュールされていないので「スケジュールに登録された更新タスクは現在ありません」と表示されます。



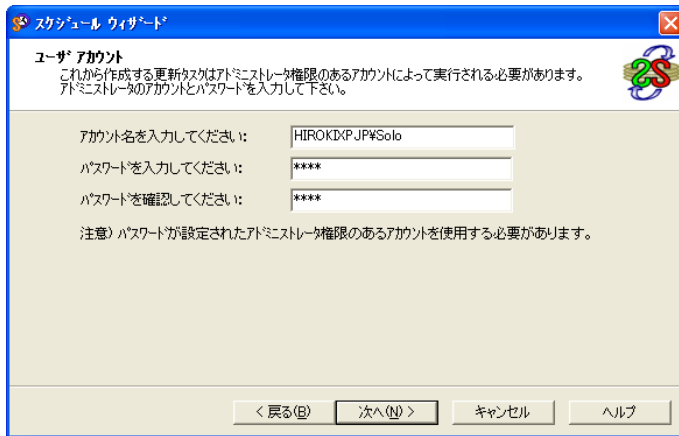
画面 -14 「StandbyDisk Solo の設定」の[スケジュール]タブが表示される

ここで[新規]というボタンを押すと「スケジュールウィザード」が起動し、スケジュール設定がはじまります。



画面 -15 スケジュールウィザード

[次へ] のボタンをクリックすると、アカウント名とパスワードの入力画面になります。これは、スケジュールを実行するにはそのコンピュータのアドミニストレータ権限（管理者権限）が必要となるからです。なお、パスワード設定のないアドミニストレータ権限では動作しないこともあるので、スケジュールを設定する際にはあらかじめアドミニストレータのアカウントにパスワードが設定されているかどうかを確認しておいてください。



**スケジュール ウィザード**

**ユーザー アカウント**  
これから作成する更新タスクはアドミニストレータ権限のあるアカウントによって実行される必要があります。  
アドミニストレータのアカウントとパスワードを入力して下さい。

アカウント名を入力してください: HIROKIDP.JPWSolo

パスワードを入力してください: \*\*\*\*

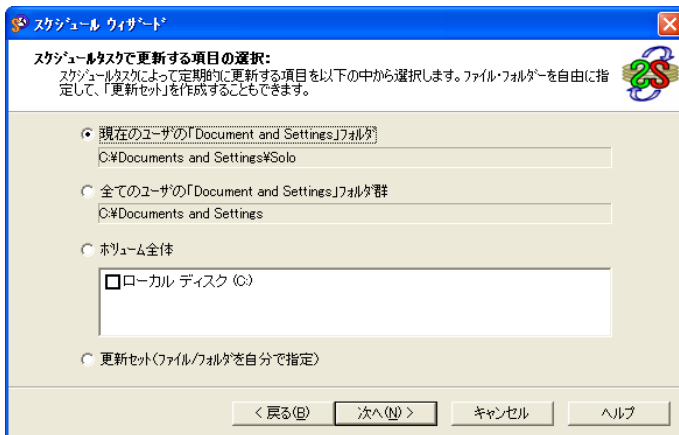
パスワードを確認してください: \*\*\*\*

注意) パスワードが設定されたアドミニストレータ権限のあるアカウントを使用する必要があります。

< 戻る(B)    次へ(N) >    キャンセル    ヘルプ

画面 -16 アドミニストレータ権限のアカウントとパスワードを入力する

アカウント名とパスワードを入力後、[次へ] をクリックします。ここで表示される「スケジュールタスクで更新する項目の選択」という画面以降がスケジュール設定のメイン部分となります。



**スケジュール ウィザード**

**スケジュールタスクで更新する項目の選択:**  
スケジュールタスクによって定期的に更新する項目を以下の中から選択します。ファイル・フォルダを自由に指定して、「更新セット」を作成することもできます。

☒ 現在のユーザーの「Document and Settings」フォルダ  
C:\Documents and Settings\Solo

☐ 全てのユーザーの「Document and Settings」フォルダ群  
C:\Documents and Settings

☐ ボリューム全体  
☐ ローカル ディスク (C:)

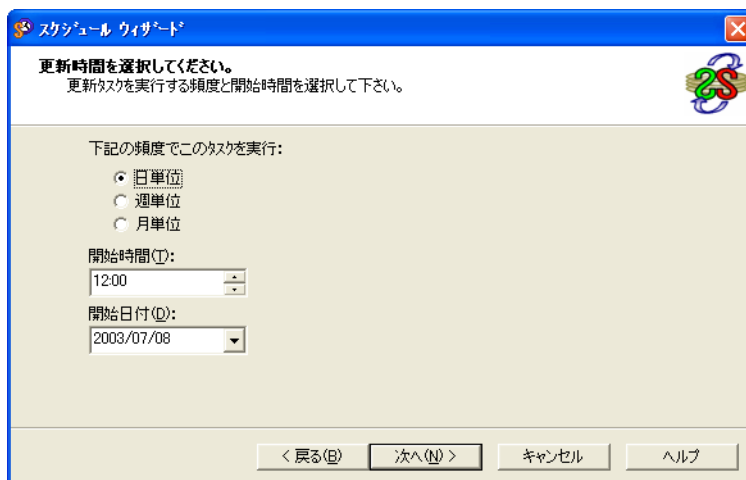
☐ 更新セット (ファイル/フォルダを自分で指定)

< 戻る(B)    次へ(N) >    キャンセル    ヘルプ

画面 -17 「スタンバイエリア更新のためのアイテム選択」

この画面には4つの項目があります。一番上は最初からラジオボタンにチェックが付いていて、マイドキュメントなどのフォルダが保管されている「Documents and Settings」フォルダの更新を行うときに選択するものです。二番目は、コンピュータに登録されているすべてのユーザの「Documents and Settings」フォルダを、三番目はボリューム全体を、四番目は任意のフォルダを指定して更新するときに選択します。

現在のユーザの「Documents and Settings」フォルダを選択したままで[次へ]をクリックします。更新間隔の設定画面になります。更新間隔は「日単位」「週単位」「月単位」の3通りで、その開始時間と日付も設定します。つまり、ここで設定した時間から数えて1日め、1週め、1ヶ月めに実行され、さらに2日め、2週め、2ヶ月め…というように実行されるわけです。ここでは例として、毎日正午に動作するようにしてみましょう。



画面 -18 更新時間間隔の設定

[次へ]をクリックすると、「タスク名」と「コメント」の入力です。といっても StandbyDisk Solo が自動的に名前を付けてくれるので、特に差しさわりがなければこのまま[次へ]をクリックします。

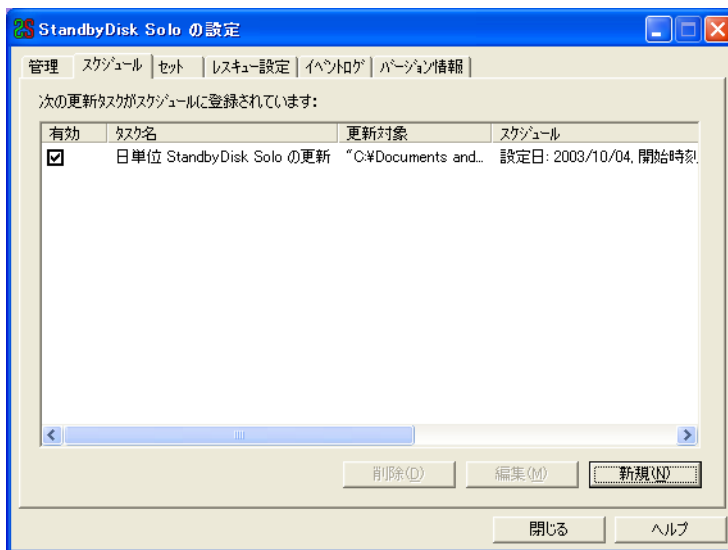
最後に **[完了]** ボタンをクリックするとスケジュールの登録は完了です。**[完了]** ボタンをクリックする前に **[完了ボタンをクリック後、拡張プロパティを開きます]** のボックスにチェックをしておくとスケジュールの登録と同時に拡張プロパティ（Windows の「タスク」に登録されたスケジュールの「プロパティ」）が開きます。これでわかるように、実際のタスクは、Windows の標準機能であるタスクスケジューラを使っているため、細かい設定などはあとからこのタスクスケジューラのプロパティで変更できます。



画面 -19 拡張プロパティで登録されたスケジュールの詳細を見る

拡張プロパティを開いた場合、特に設定変更がない場合は、**[キャンセル]** ボタンをクリックします。

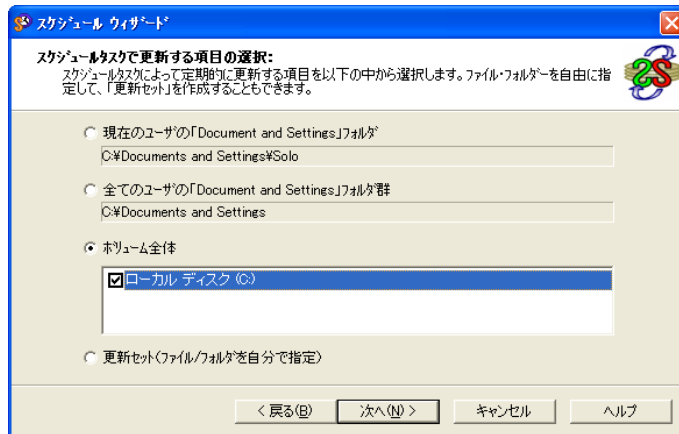
登録されたスケジュールを変更したい場合、削除したい場合は「StandbyDisk Solo の設定」から[スケジュール]タブを表示させ、該当するスケジュールをクリックして選択してから、下にある[削除]や[編集]ボタンをクリックします。編集にした場合、拡張プロパティが開くので、そこで変更を行います。ただし、これはWindowsの標準機能ですのでウィザードにくらべると少々設定が専門的です。わからない場合には、一度削除してからスケジュールウィザードを使って登録し直した方がやりやすいかもしれません。



画面 -20 登録されたスケジュールを変更したい場合には、選択して[編集]ボタンをクリック



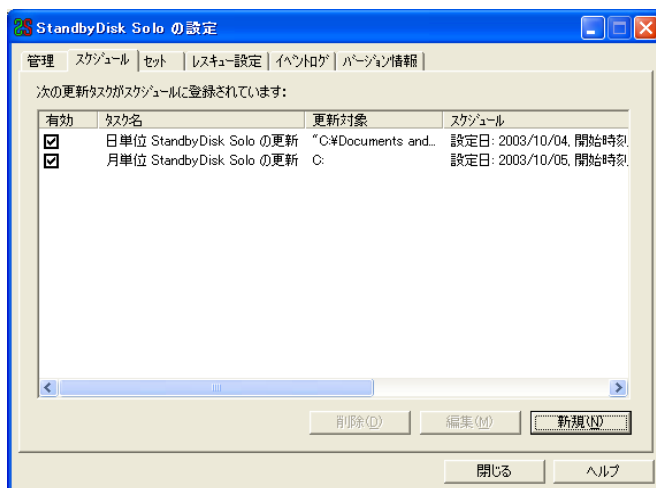
次に別のスケジュールとして、ボリューム全体の更新をスケジュール登録します。「Documents and Settings」フォルダのスケジュール登録を行ったときと同様に「スケジュールタスクで更新する項目の選択」画面を表示させます。ここでは[ボリューム全体]を選択し、システムボリューム（多くはC:）にチェックマークを入れて[次へ]をクリックします。



画面 -21 「スタンバイエリア更新のためのアイテム選択」ボリューム全体の更新

更新間隔の設定を行い、「タスク名」、「コメント」を確認し[次へ]をクリックします。先ほどと同様に最後に[完了]ボタンをクリックして終了です。

「StandbyDisk Solo の設定」から[スケジュール]タブを表示すると「Documents and Settings」フォルダの更新スケジュールと「ボリューム全体」の更新スケジュールの2つのスケジュールが登録されていることが分かります。



画面 -22 「スタンバイエリア更新のためのアイテム選択」ボリューム全体の更新

## STEP 4    トラブルが発生した場合の操作

### レスキュー起動の概要

StandbyDisk Solo をインストールし、ボリューム更新が完了すると、起動時に「Protected by StandbyDisk Solo」と画面上に 2 秒程度表示されます。これは StandbyDisk Solo のプログラムが、正常な起動かどうかを監視していることを示しています。

正常な起動ができない場合、自動的にレスキュー起動メニューが表示されます。ただし、1 度の起動でレスキュー起動メニューの表示が行われるのではなく、ある基準が設けられています。

その基準とは、「3 回起動に失敗したときに自動的にレスキュー起動メニューが表示される」というものです。（この回数はインストール時に設定されるもので、ユーザは 2 回～10 回の回数設定が可能です。）典型的な例としては、システムの状態がおかしくなって、リスタートを何回か繰り返しても起動（OS の起動状態）に至らないようなケースです。

また、自動レスキューに頼らない手動のレスキュー起動もあります。3 回を待たずとも「おかしい」と思ったら手動でレスキュー起動メニューを表示することも可能になっています。

どちらにせよ、レスキュー起動が行われると、今までスタンバイエリアにあった内容と、問題が生じたカレントエリア（使用していたエリア）が入れ替わり、最後にボリューム更新を行った状態に戻されます。

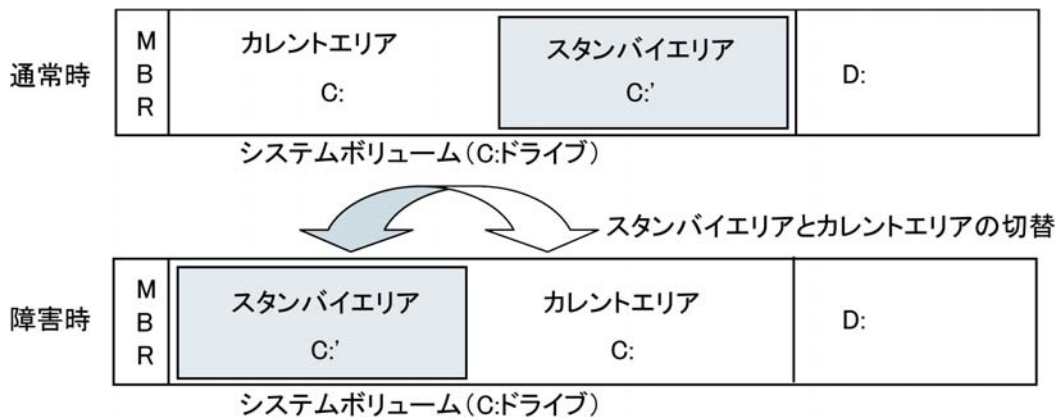


図 -8 レスキュー起動によってエリアが切り替わる

## 自動レスキュー起動

StandbyDisk Solo をインストールし、ボリューム更新が完了すると、自動レスキュー起動が有効に設定されます。

前項で述べたように、パソコンの起動に 3 回続けて失敗すると、その次に起動したときに自動レスキューが行われ、「Rescue Boot Menu」が立ち上がります。

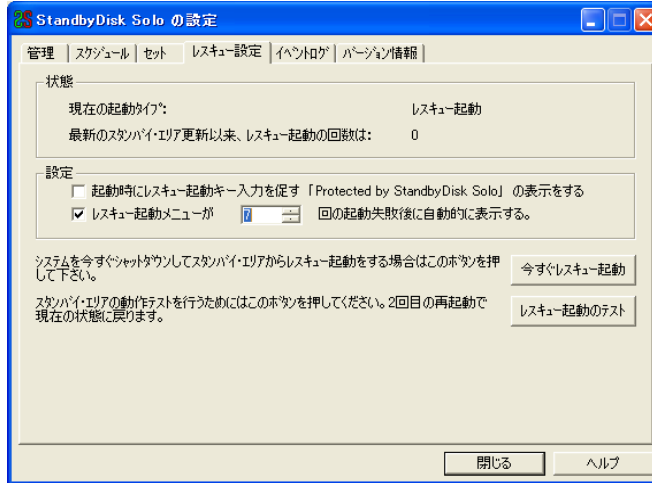
ここで、**[1. Rescue Boot]** を選べばレスキュー起動がはじまります。**[2. Normal Boot]** は通常に起動させるものです。何らかの操作ミスなどで Rescue Boot Menu が起動してしまったときなどには Normal Boot を選んで通常の起動を行うことができるわけです。



画面 -22 レスキューブートメニュー

**[1. Rescue Boot]** を選んでレスキュー起動が始まると、それまでのスタンバイエリアが、問題の生じたカレントエリアと入れ替わり、そしてシステムが起動します。システムが起動すると、一見していままでの状態が復旧しているように感じますが、最後の更新とのタイムラグがあるので、状況に応じてスタンバイエリアに置き換えられたファイルの中から、個別ファイルやフォルダの復旧を行わないといけません。

また、パソコンの起動失敗回数は、2回～10回までの間で指定することが可能です。「StandbyDisk Solo の設定」で[レスキュー設定]タブを選び、[レスキュー起動メニューが3回の起動失敗後に自動的に表示する]にチェックマークを入れて、回数を指定します。



画面 -23 パソコンの起動失敗回数を2回～10回の間で指定できる

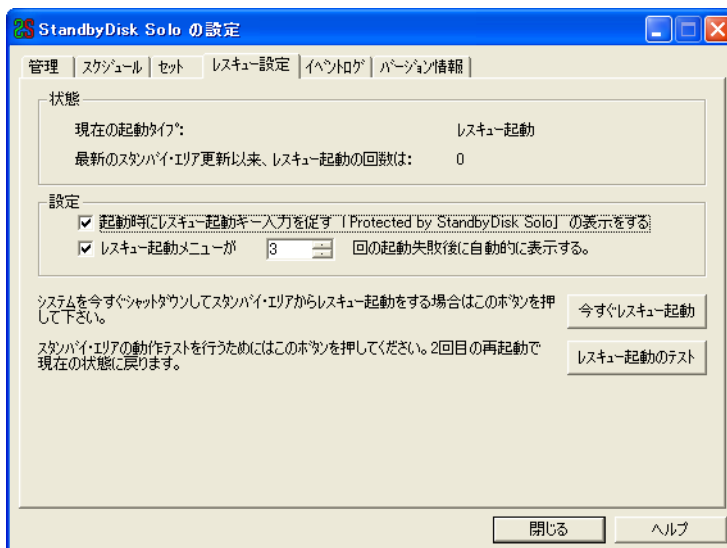
## 手動レスキュー起動

自動レスキュー起動ではない起動方法を手動レスキュー起動としましたが、これには2つの方法があります。

ひとつ目はパソコンが起動するときに、[Alt] キーと [CapsLock] キーを同時に押して「Rescue Boot Menu」を表示させる方法です。メニューが表示されたあとは、自動レスキュー起動のときと同様に [1. Rescue Boot] を選んでレスキュー起動を開始します。

なお、[Alt] キーと [CapsLock] キーを押すタイミングですが、インストールされた状態では、BIOS のチェック終了後に「Protected by StandbyDisk Solo」という文字が画面上に表示されるので、このときに2つのキーを押すようにします。

もうひとつの方法は、「StandbyDisk Solo の設定」で [ レスキュー設定 ] タブを選び、[ **今すぐレスキュー起動** ] ボタンをクリックすることです。



画面 -24 [ **今すぐレスキュー起動** ] ボタンを押せばすぐにレスキュー起動開始

メッセージが表示されたあとシステムがシャットダウンし、再起動後にレスキュー起動が行われます。システムがシャットダウンされるので、他に起動しているアプリケーションはあらかじめ終了しておき、また、ファイルの保存なども行っておく必要があります。

## 個別ファイル・フォルダの復旧

レスキュー起動によって、ボリューム自体は復元されますが、最後のボリューム更新を行ってからトラブルが起きる直前までのファイルやフォルダはレスキューされていません。これらのファイルは、レスキューによって入れ替わった結果スタンバイエリアに置かれています。こうしたファイルやフォルダを個別にスタンバイエリアからカレントエリアへ戻してやることで、復旧の度合いを高めることができます。

ただし、スタンバイエリアにあるファイル/フォルダをカレントエリアに書き戻すと、それまであったファイル/フォルダを上書きしてしまいます。その結果としてどちらも同じものになってしまうから、万が一そのファイルやフォルダに問題があったりした場合、救済手段が無くなってしまいます。このような事態を避けるためには、まずカレントにあるファイル/フォルダ名を違うものに換え、それから個別の復旧を行うのがもっとも安全です。

もうひとつの復旧方法として、ある特定のファイルやフォルダに問題が生じた場合に、スタンバイエリアにあるファイルやフォルダを個別に復旧させるということもできます。この場合、レスキュー起動は必要ありません。単純に他のハードディスクやフォルダにバックアップしておいたファイルやフォルダを書き戻すというイメージです。

どちらの場合も、StandbyDisk Solo エクスプローラで操作を行います。

StandbyDisk Solo エクスプローラで保護されたボリュームをダブルクリックすると、「カレント / スタンバイファイル比較」という画面が表示されます。

これが、カレントエリアとスタンバイエリアにあるファイルやフォルダの比較画面で、それぞれについての詳細なデータが表示されています。

カレントファイル名	スタンバイファイル名	スタンバイ状態	カレントファイルの日付	スタンバイファイルの日付	カレントサイズ	スタンバイサイズ	種類	カレント...	スタンバイ...
Documents and Settings	Documents and Settings		2003/09/12 12:15	2003/09/12 12:15			フォルダ		
Program Files	Program Files		2003/09/12 13:14	2003/09/12 13:14			フォルダ	R	R
Recycled	Recycled		2003/10/01 14:25	2003/10/01 14:25			フォルダ	HS	HS
SYSTEM VOLUME INFORMATION			2003/09/12 13:22				フォルダ	HS	
WINDOWS	WINDOWS		2003/09/12 12:08	2003/09/12 12:08			フォルダ		
AClient.cfg	AClient.cfg	同期	2003/10/04 11:06	2003/10/04 11:06	143 KB	143 KB	CFG ファイル	A	A
AClient.dat	AClient.dat	同期	2003/10/01 13:53	2003/10/01 13:53	41 バイト	41 バイト	DAT ファイル	A	A
AUTOEXEC.BAT	AUTOEXEC.BAT	同期	2003/09/12 13:16	2003/09/12 13:16	0 バイト	0 バイト	MS-DOS バッ...	A	A
boot.ini	boot.ini	同期	2003/09/12 13:07	2003/09/12 13:07	194 バイト	194 バイト	構成設定	HS	HS
bootfont.bin	bootfont.bin	同期	2001/08/27 12:00	2001/08/27 12:00	129 KB	129 KB	BIN ファイル	RHSA	RHSA
CONFIG.SYS	CONFIG.SYS	同期	2003/09/12 13:16	2003/09/12 13:16	0 バイト	0 バイト	システム ファ...	A	A
hiberfil.sys		無し(カレント...)	2003/10/04 11:06		319 MB		システム ファ...	HS	
IO.SYS	IO.SYS	同期	2003/09/12 13:16	2003/09/12 13:16	0 バイト	0 バイト	システム ファ...	RHSA	RHSA
MSDOS.SYS	MSDOS.SYS	同期	2003/09/12 13:16	2003/09/12 13:16	0 バイト	0 バイト	システム ファ...	RHSA	RHSA
NTDETECT.COM	NTDETECT.COM	同期	2003/09/12 13:45	2003/09/12 13:45	464 KB	464 KB	MS-DOS アプ...	RHSA	RHSA
ntldr	ntldr	同期	2003/09/12 13:45	2003/09/12 13:45	239 KB	239 KB	不明なファイル	RHSA	RHSA
PAGEFILESYS		無し(カレント...)	2003/10/04 11:06		480 MB		システム ファ...	HS	

画面 -25 「カレント / スタンバイファイル比較」の画面

上記の画面で「スタンバイ状態」という欄がありますが、ここに表示される状態が、ファイルの新旧と存在の有無などを示しています。表示される状態は以下の 5 種類です<sup>(1)</sup>。

1. フォルダの状態は表示されません

- **新しい（カレントよりも）**－スタンバイエリアにあるもののほうがカレントエリアのものより新しい場合
- **古い（カレントよりも）**－スタンバイエリアにあるものがカレントエリアにあるものより古い場合。カレントファイルに作業をくわえるなどをして新しい状態になっているときなどがこれに相当
- **同期**－どちらも同じである場合
- **スタンバイのみ**－カレントエリアにはなくてスタンバイエリアのみに存在する場合。カレントエリア側で削除を行ったか、カレントエリアにのみあったものがレスキューで入れ替わってしまったケースが考えられます。
- **無し（カレントのみ）**－カレントエリアのみに存在し、スタンバイエリアにはない状態。カレントエリアにファイルを作成した後、更新を行っていないことが考えられます。

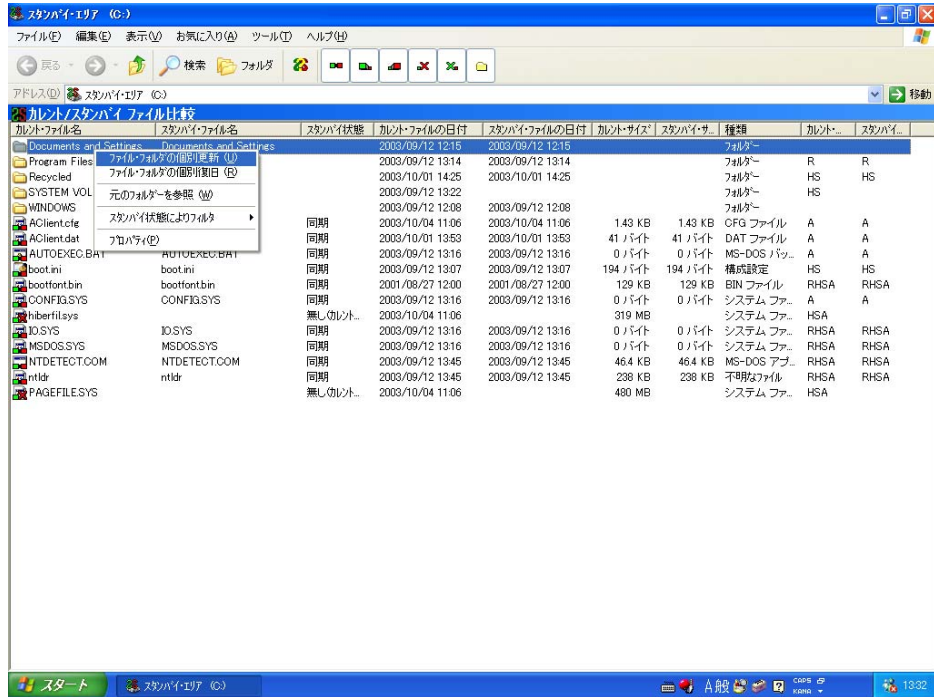
個別復旧はこの状態を見ながら行えば、比較的安全に作業することができます。

具体的には、操作したいファイルやフォルダを選択し、マウスの右ボタンで表示されるコンテキストメニューを使用します。

- 選択アイテムをスタンバイエリアに個別更新
- スタンバイエリアから選択アイテムを個別復旧

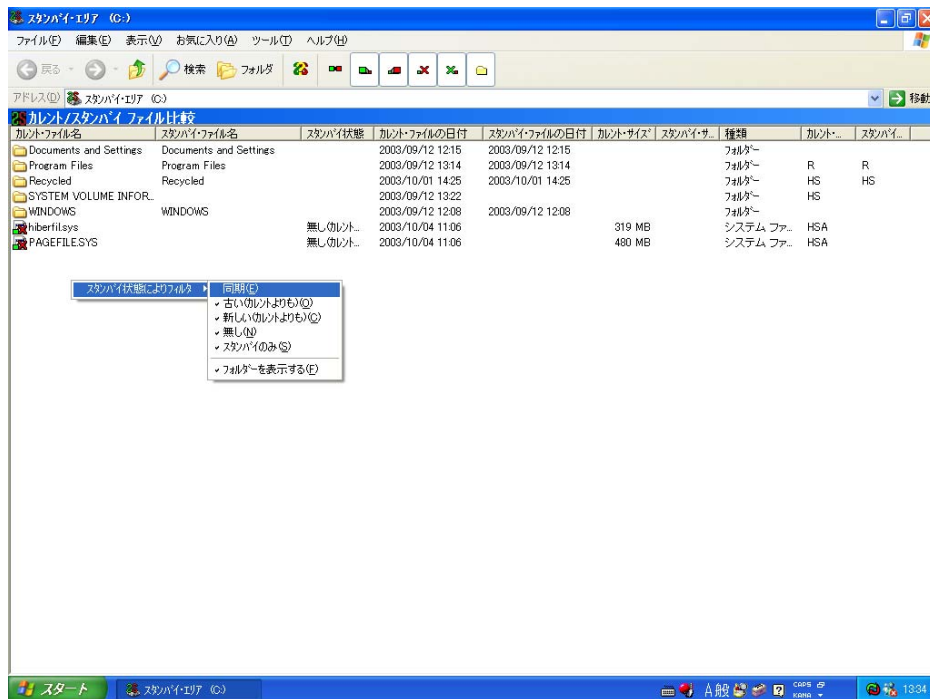


上はカレントエリアにあるものをスタンバイエリアに更新するもの、下はスタンバイエリアにあるものをカレントエリアに復旧されるもので、レスキュー起動後に個別ファイルを復旧させる場合はこれを選びます。



画面 -26 個別更新 / 復旧のコンテキストメニュー

また、目的のファイルを見つけやすくするために「スタンバイ状態によりフィルタ」機能を使うと便利です。前述の 5 種類の状態のうち、どれか一種類または数種類を指定して画面上に表示させることができます。これを使えばより安全に作業をすることが可能です。



画面 -27 スタンバイ状態の種類を選んで表示

その他には、「元のフォルダーを参照(W)」というメニューがあります。これは個別ファイル/フォルダを復旧させる前に、念のためカレントエリアにあるファイルやフォルダを参照する機能で、他のフォルダに待避させたり名前を変えたりするときに便利です。

## STEP 5 レスキューと復旧後に行う作業

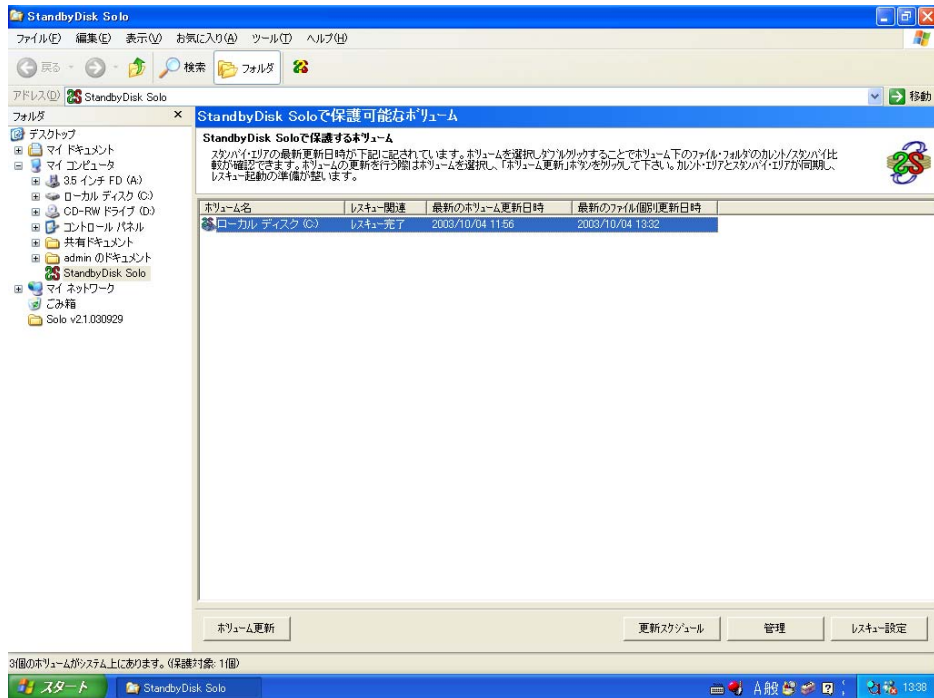
### レスキュー後のハードディスクの状態

レスキュー起動を行い、さらに個別ファイルとフォルダの復旧を行ったら、スタンバイエリアに残されているのは、いわばつまみ食いをした状態のファイルやフォルダということになります。

これでは、次回に何かしらの障害が起きたとしても被害を防ぐことはできません。

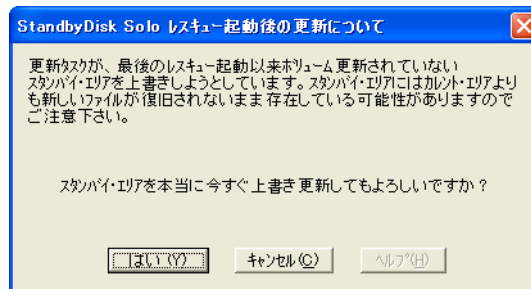
そこで、一通りの復旧作業が終了したら、スタンバイエリアに対して更新をかけ、レスキュー可能な状態に戻しておいてやる必要があります。

レスキュー後、StandbyDisk Solo エクスプローラの画面を表示させると、「レスキュー可」から「レスキュー完了」に状態が変わっていると思います。



画面 -28 レスキュー完了になっている

STEP 4 で説明したように、レスキュー起動後に必要なファイルやフォルダを個別復旧させたら、StandbyDisk Solo エクスプローラでシステムボリュームを選択し、[ **ボリューム更新** ] ボタンをクリックしてボリューム更新を行います。このとき、スタンバイエリアがボリューム更新により上書きされることを知らせる警告メッセージが表示されます。

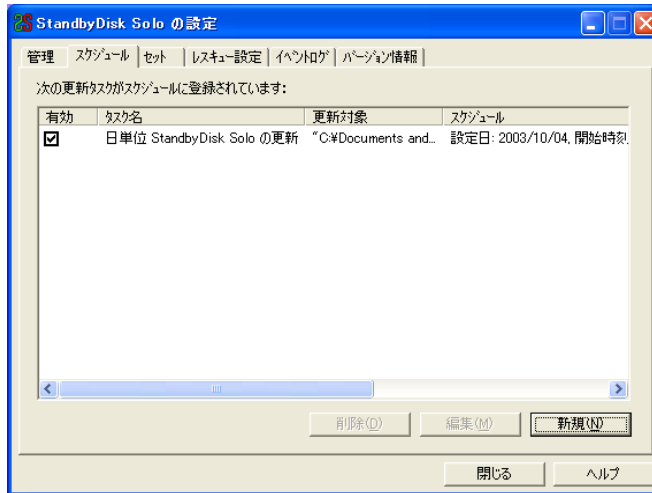


画面 -29 スタンバイエリアが上書きされることを知らせるメッセージが表示される

このメッセージは、レスキュー起動後にスケジュール設定された時刻がやってきた場合にも表示されます。

## スケジュールも再度確認する

レスキュー起動を行うと、最後にボリューム更新した時点で使用していたスケジュール設定も戻されます。レスキュー起動後は、必ず[ **更新スケジュール** ] ボタンで、登録されているスケジュール設定を再度確認します。



画面 -30 レスキュー起動後は必ずスケジュール設定を確認する

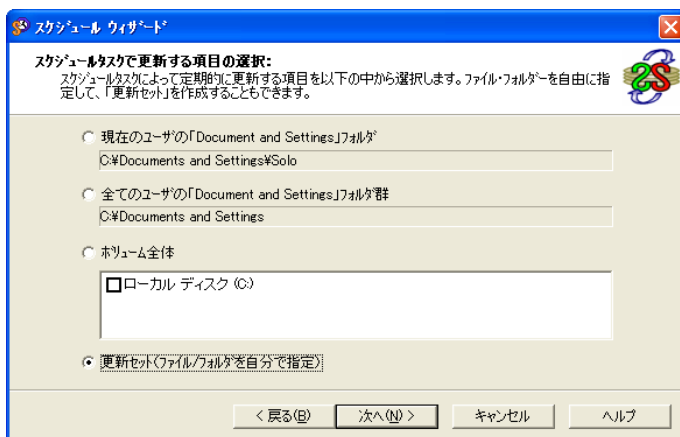
レスキュー起動してから次にボリューム更新が行われるまでの間、設定されていたスケジュール時刻になると、スタンバイエリアがボリューム更新により上書きされることを知らせる警告メッセージ (44 ページの図 27 を参照) が表示されます。

## その他の有用な情報

### 複数のフォルダやファイルをスケジュールで更新

「Documents and Settings」フォルダや「ボリューム全体」だけではなく、複数のフォルダやファイルを選んで一度に更新するスケジュールも作成できます。

「スケジュールウィザード」画面で[更新セット]を選択し、[次へ]をクリックします。



画面 -31 更新セットを選択して、複数のフォルダやファイルをスケジュールで一度に更新

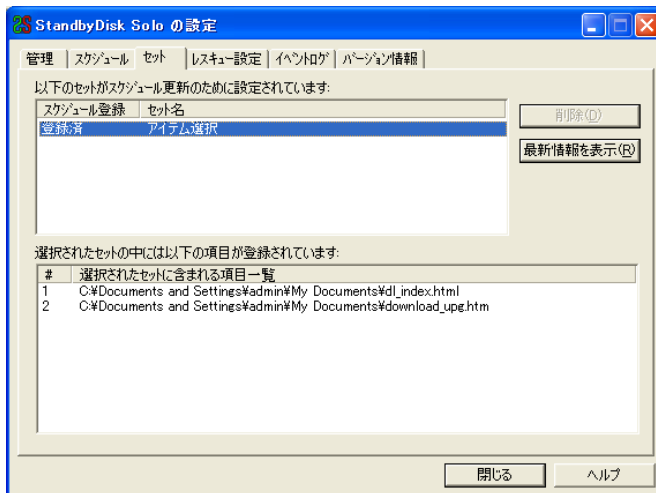
表示されたツリーの中から、更新したいフォルダの中身を丸ごと、またはフォルダ内にあるファイルをいくつか選んで[次へ]をクリックします。



画面 -32 好きなフォルダやファイルを選択

更新間隔の設定を行い、スケジュールを登録します。

スケジュール作成時にどのフォルダとファイルを選んだかを調べるには、「StandbyDisk Solo の設定」で**[セット]**タブを表示します。[セット]タブには、更新セット名、更新セットに登録されているファイル名が表示されるのでとても便利です。

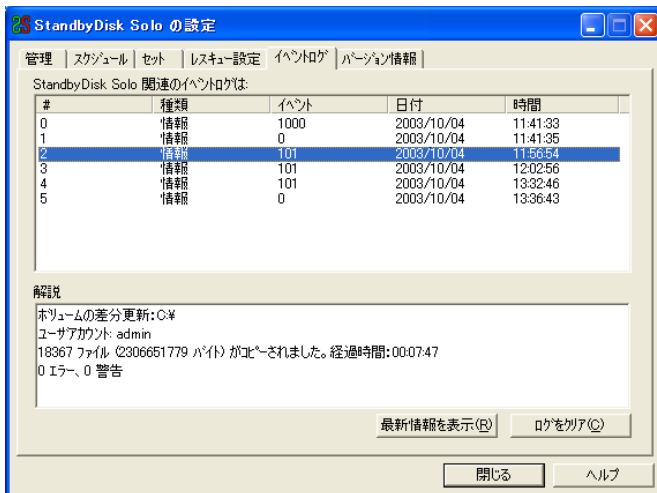


画面 -33 [セット] タブで更新セットの中身を確認

## [ イベントログ ] タブで以前の更新、レスキュー起動を確認

[ イベントログ ] タブでは、StandbyDisk Solo が行った、自動、手動による更新、レスキュー起動、またスケジュールによる更新などの日時、作業内容の解説が表示されます。

「StandbyDisk Solo の設定」で [ イベントログ ] タブを表示します。



画面 -34 [ イベントログ ] タブで以前の作業をチェック



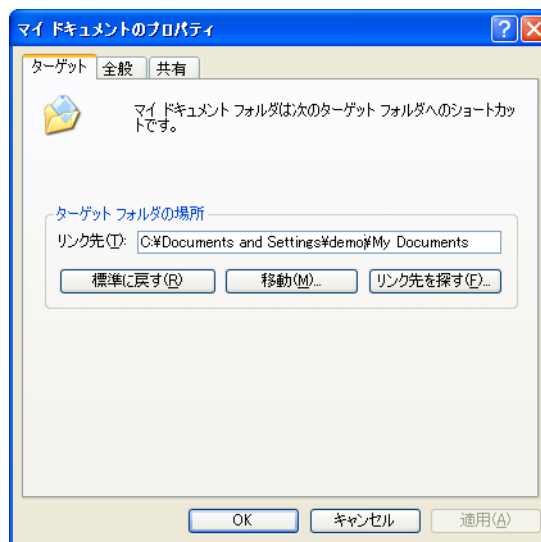
## 市販パソコンのパーティションについて

市販のパソコンは、多くの場合ハードディスクを1台だけ搭載しています。

そして、その1台のハードディスクを2つのパーティションに分割し、ひとつをシステム用に、もうひとつをデータ用に使っています。

このような場合、データ用のパーティション（ボリューム）に対しては StandbyDisk Solo はなんら関与ができません。StandbyDisk Solo はシステムボリュームに対してのみ有効なソフトウェアだからです。

こうした構成では、データ領域を「マイドキュメント」フォルダに割り当てて使うケースも多いと思われます。このようにしておけば、システムボリュームに問題があっても、違うパーティションであるデータ用パーティションは被害を受けにくくなります。「マイドキュメント」の実際に存在するフォルダを変更するには、デスクトップ上にある「マイドキュメント」のプロパティを表示させ「ターゲット」というタブを選びます。



画面 -35 [ターゲット] タブ

ここで「リンク先」にデータ用ボリュームのフォルダ名を入力し（とくに希望がなければ「D:\My Documents」としておけばよいでしょう）、[移動] ボタンをクリックします。すると、新しいフォルダが「マイドキュメント」フォルダの実体として使われるようになります。

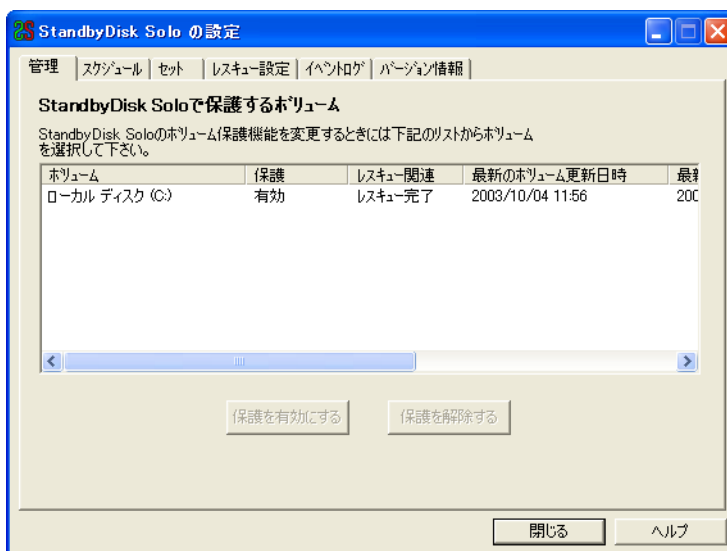
こうしておけば、頻繁に更新するデータなどはレスキュー後に復旧する必要もなくなります。

しかし、復旧する必要がないということは、保護もされないということです。重要なデータを保護したいならば、StandbyDisk Solo でスケジュール更新をする方が安全です。こうした使い方をするのであれば、むしろデータドライブを使用せずパーティションを1つに統合し、全体をStandbyDisk Solo で保護する方がよいでしょう。

## 保護の解除

StandbyDisk Solo の保護を解除すると、スタンバイエリアは削除され、二重化される前のもののハードディスクの状態に戻ります。一度保護を解除すると、スタンバイエリアに保護されていたデータも消えてしまいますので、解除作業は慎重に行う必要があります。

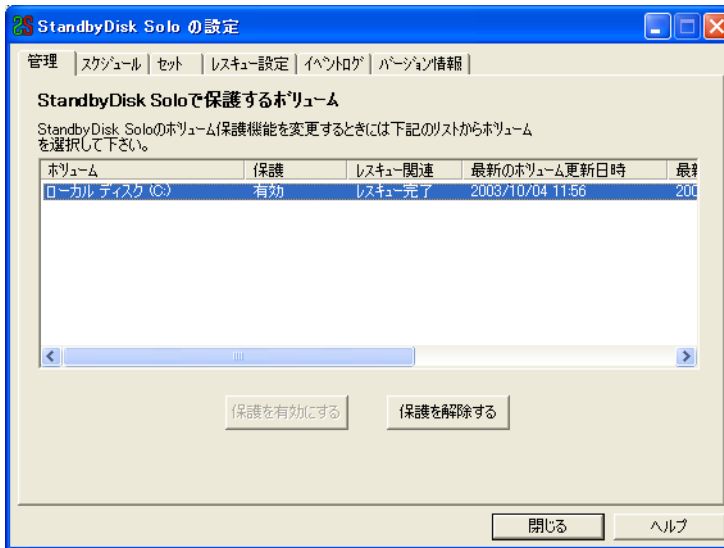
保護の解除は、StandbyDisk Solo エクスプローラで **[ 管理 ]** というボタンをクリックします。



画面 -36 [ 管理 ] ボタンをクリックする

すると、「StandbyDisk Solo の設定」で **[ 管理 ]** タブが表示されます。

ここで、保護を解除したいボリュームを選択し、[ 保護を解除する ] というボタンをクリックします。



画面 -37 管理タブで保護を解除

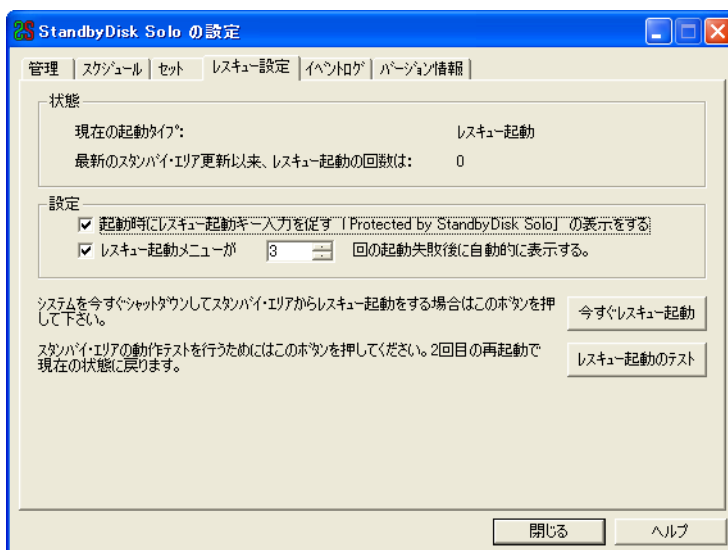
スタンバイファイルを全て削除することになるので、スタンバイエリアのサイズによっては、保護の解除に時間がかかることがあります。

## テストレスキュー起動の活用

トラブルが生じたときに、レスキュー起動がうまくいけばよいのですが、ぶっつけ本番でトラブルが生じるのを待つのも心配です。そのようなときには、「テストレスキュー起動」を使って動作を確認しておくで安心です。

テストレスキュー起動は、「StandbyDisk Solo の設定」で [ **レスキュー起動** ] タブを選び、[ **レスキュー起動のテスト** ] ボタンを押すことで動作します。

また、最新の Windows サービスパックや、ドライバ類、新規にアプリケーションを導入する際に、正常に動作するものか不明な場合にも活用すると便利です。



画面 -38 テストレスキュー起動は [ **レスキュー起動のテスト** ] ボタンを押す

このボタンを押すと、すぐにシステムがシャットダウンに入るので、あらかじめ他のアプリケーションなどは終了しておきます

テストレスキュー起動が普通のレスキュー起動と違うのは、レスキュー起動後に操作をして確認をしたのち、もう一度再起動すると元の状態に戻ることです。つまり、レスキュー起動したあとの状態はあくまでも確認を行うだけのもので、実際この状態では更新や復旧は行えません。

ただし、テストレスキュー後ファイル操作を行った結果は、再起動後はスタンバイエリアに残りますので、故意にファイル操作の結果を残しておきたいとき以外はボリューム更新することをお奨めします。

## 更新できないファイルについて

ボリューム更新を行ったにもかかわらず、更新されていない（古い）ファイルが表示されることがあります。

こうしたファイルにはいくつか種類がありますが、メモリスワップファイルや、ログファイルなどのようなファイルは起動時に生成されることや絶えず更新が行われることがあり、ボリューム更新を行ったにもかかわらず、スタンバイエリアに存在しない、あるいは古いものがスタンバイエリアに存在すると表示されるわけです。

こうしたファイルは、たとえ更新されないとしてもさほど影響はありません。また、他のアプリケーションを StandbyDisk Solo の更新時に起動したままにしておくと、そのアプリケーションが使用しているために StandbyDisk Solo で更新作業が行えないものがあります。このような事態を防ぐためにも、StandbyDisk Solo で更新を行う際には他のアプリケーションを終了しておく必要があります。

もうひとつ、StandbyDisk Solo のボリューム更新などのサービスを行うアカウントが、そのファイルを操作できないアカウントである場合にも、更新が行えません。通常は管理者権限で StandbyDisk Solo の作業を行うので問題はないと思いますが、日常のログインを通常のユーザー権限で行っているユーザーは注意が必要でしょう。

## もうひとつのお勧め設定

ノートパソコン・ユーザーや企業でご利用の場合、最初のボリューム更新後は、アプリケーションや OS のサービスパックのインストール時以外は、一切スケジュール更新設定をしないで使用することも考えられます。

この使用方法ですと、全く負荷がかかりませんし、万一障害発生の場合でも、レスキュー起動後 StandbyDisk Solo エクスプローラから最新のデータを復旧させることが可能です。

## さらに便利に

レスキュー起動とボリューム更新用に、専用の実行モジュールを用意しています。各種パラメータの組み合わせが可能ですので、パッチファイルや Altiris eXpress Deployment Server 等の運用管理ツールで利用すれば、自動実行やリモート管理が可能となります。

学校などで環境復旧を定期的に行いたい場合などに便利です。

詳しくは HELP やリファレンスマニュアルをご参照ください。

